

令和6年度

研究紀要

第26号

河北町教育研究所

令和6年度 河北町教育研究所 研究紀要

1	研究紀要の発刊に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・	3
2	あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・	4
3	令和6年度河北町教育研究所〈概要〉について・・・・・・・・	5
4	河北町教育研究所 令和6年度組織運営機構図・・・・・・・・	7
5	研究部会・・・・・・・・・・・・・・・・	8
	（1）授業改善部会・・・・・・・・・・・・・・・・	9
	（2）児童生徒理解部会・・・・・・・・・・・・・・・・	11
	（3）特別支援教育部会・・・・・・・・・・・・・・・・	13
	（4）教育行財政部会・・・・・・・・・・・・・・・・	15
6	専門部会・・・・・・・・・・・・・・・・	17
	（1）学力向上対策部会・・・・・・・・・・・・・・・・	18
	（2）生徒指導部会・・・・・・・・・・・・・・・・	27
	（3）特別支援学級部会・・・・・・・・・・・・・・・・	29
	（4）保健部会・・・・・・・・・・・・・・・・	31
	（5）幼小連携部会・・・・・・・・・・・・・・・・	33
7	公開授業研究会（西里小学校）・・・・・・・・・・・・・・・・	35
8	学校研究・・・・・・・・・・・・・・・・	40
	（1）溝延小学校・・・・・・・・・・・・・・・・	41
	（2）谷地中部小学校・・・・・・・・・・・・・・・・	43
	（3）谷地南部小学校・・・・・・・・・・・・・・・・	45
	（4）谷地西部小学校・・・・・・・・・・・・・・・・	47
	（5）北谷地小学校・・・・・・・・・・・・・・・・	49
	（6）河北中学校・・・・・・・・・・・・・・・・	51
9	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	55

研究紀要の発刊に寄せて

河北町教育委員会教育長 板 坂 憲 助

異常気象による自然災害が毎年繰り返され、今年度も甚大な被害が出てしまいました。令和6年7月の最上・庄内地方の洪水被害であります。パトカーが流され裏返しになった光景や酒田市の荒瀬川の土石流で埋め尽くされた被害状況は、まさに自然の猛威の恐ろしさに身震いする感があり、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに一日も早い復旧・復興を願っているところです。一方、学校教育においては、授業参観を終えた保護者からの声として、昔とはすっかり授業風景が変わったとの声が聞かれます。更には、学校行事である運動会も、秋が定番でしたが、夏の酷暑を避けるために町内全ての小学校で5月から6月に行われるようになりました。まさに、変化の激しい社会情勢を実感しているところであります。

このような状況の中、2年に1度の町の研究委嘱として本年度は西里小学校において研究公開が実施されました。研究主題「自ら学びをつくる子どもの育成(3年次)～子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して～」のもと、町内全教職員が参加して行われました。私は、上記の主題に迫る授業が実現しているかの視点として、次の4点をもとに参観しました。

- 1 課題は子どもに届いていたか。つまり、自分事として課題が持っていたか。
- 2 対話は成立していたか。つまり、子ども同士が必要感をもって対話がなされていたか。
- 3 全員が本時の目標を実現できていたか。つまり、子どもなりのまとめが行われ、教師はそれらを価値づけていたか。
- 4 子どもは満足・納得したか。つまり、適切な振り返りがあり、子どもが学んだ意義を感じたか。

3つの分科会において、各学校の先生方から活発な意見が出され、有意義な研修会であったと思います。教育は「子どもを見抜くことから始まる」と言われます。変化の激しい世の中にあって、今後とも教育の神髄を見失うことなく、教師のコーディネート力のもと、子ども同士の対話を通して各教科の本質に触れる授業の展開を願っています。

最後に、本研究所の活動のために、ご指導をいただきました先生方や全所員の皆様のご協力に感謝を申し上げ、発刊に当たってのあいさつといたします。

あ い さ つ

河北町教育研究所 所 長 鈴 木 正 直

「日本社会に根ざしたウェルビーイング」が、第4期教育振興基本計画で提唱されました。社会の変化が我々の想像を超越してきた今、ウェルビーイングの視点から教育活動の見直しが求められています。河北町教育研究所としても、ここを意識し「個別最適な学びと協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」の充実を図ってきました。そして「温かい学級づくり」と「わかる授業づくり」によって、人や学習、様々な物事とつながって学んでいくことの楽しさとその価値にも気づかせてきました。全ての教育活動の中で一人ひとりを大切にしながら実践研究し、ウェルビーイングを味わえる魅力ある学校づくりを目指して力を合わせてきたことは、河北町の学校教育を支える大きな力となりました。

全所員研修会の町委嘱公開授業研究会では、西里小学校において「自ら学びをつくる子どもの育成～子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して～」をテーマにして、算数と社会の授業研究会が行われました。確かな学力をつける授業づくりの視点を①主体的な学びをつくる「単元計画の工夫」②対話が生まれるような「学び方の工夫」③子どもの学びを見取る「評価の工夫」とした実践が発表されました。そして、「自ら学びをつくる」には、まずは自分で考え、判断し、協働的な学びの中で進んで対話を重ね、考えを広げたり深めたりすること、粘り強く課題に取り組む力をつけることの重要性が説かれ、その手立てについても活発に意見が交流されました。また、学びの基盤である学級づくりにおいて、互いを認め合い共感的な関わりができる集団の力を育てるポイントについても議論されました。小学校・中学校の枠を超えて、授業づくりと子どもたちの姿を見取り、学びのつながりを広く、深く、熱く語り合う先生方の姿にも感銘を受けました。

各研究部においては、授業改善部会は「授業改善と特別活動」、児童生徒理解部会は「的確な子ども理解と効果的な支援」、特別支援教育部会は「自立を目指した支援のあり方」、教育行財政部会は「信頼に応える学校事務」、各専門部会においては、学力向上への対策、規範意識の向上、自立活動の支援、養護教諭の執務の向上、幼児教育と小学校教育のつながりをテーマに、研修を深め学校運営に活かすことができました。

今後とも「チーム河北」として、子どもたちの明るい未来のために、所員の個性を生かしながら一枚岩となって精進していきましょう。そして「ふるさとに学び、互いに高め合いながら、いきいきと未来をひらく人づくり」と各校の学校教育目標の具現化に向けて、たくさんのウェルビーイングを実感できるよう人間性と専門性を磨いていきたいものです。きっとそこには、「教師ならではの醍醐味と誇り」が待っているはずです。

最後になりますが、ご指導をいただきました講師の先生方、そして日々の教育に情熱を注いでくださっている全所員の皆様、ご支援・ご協力をいただきました河北町教育委員会をはじめ関係各位に、心より感謝申し上げます。

令和6年度河北町教育研究所<概要>について

2024.4.1 河北町教育委員会

<第8次河北町総合計画>

「輝く人・町 夢と未来へ挑戦するまち」

<第6次山形県教育振興計画>

「人間力に満ちあふれ、山形の未来をつくる人づくり」

<第2次河北町教育振興計画（後期） 基本目標>

**ふるさとに学び、互いに高め合いながら
いきいきと未来をひらく人づくり**

河北の人、自然、歴史、文化のよさに浸り、ふるさとを愛する心を養うとともに、町民が生き生きと学び合い、高め合いながら、次代を担う人材を育成します。

今年度は、幼児教育や高校教育の実践にも触れてみましょう。

令和6年度のテーマは「幼小中高連携」

<組織と活動計画>

	部会名	主な内容	期日
研究部	授業改善部会	全国学調の結果を生かした授業改善	8/1 (夏の半日研)
	児童生徒理解部会	生徒指導の4つの視点を生かした学級経営、いじめ・不登校の未然防止	
	特別支援教育部会	通常学級における特別支援教育、切れ目ない支援	
	教育行財政部会	適切な行財政運営	
専門部	学力向上対策部会	小・中学校における学びの系統性	6/21・11/14
	生徒指導部会	不登校の未然防止、引継ぎの在り方	7/9・12/5
	特別支援学級部会	保護者とともに歩む支援の在り方	5/24
	保健部会	喫緊の教育課題に対する対応	5/8・10/17・1/23
	幼小連携部会	幼小架け橋プログラムの推進	6/11・11/26



R6 新設しました。幼稚園・こども園の担当者も参加し、互いの授業・保育の様子を参観します。子供の学びの姿について語り、スムーズな幼小の接続の在り方を考えます。

昨年度の取り組み・研究紀要はこちらから ⇒⇒⇒



※このほか、事務局会、運営委員会が年2回ずつ行われます。

<学校間交流>

- ・町委嘱公開授業研究会 河北町立西里小学校 11月8日（金）全所員参加
- ・各学校校内授業研 年1回は、他校の授業研に参加し、子どもの姿で語り合おう。
※学校の実態に合わせて、低・中・高学年部会や教科部会から代表者が参加し、校内で共有するなど工夫をお願いします。 裏面も **Check!!**

各学校の校内授業研究会の日程

昨年度は、他校の授業研究会に小中合わせて延べ76名の先生方の参加があり、学びを深めることができました。今年度もたくさんの学びを共有しましょう。

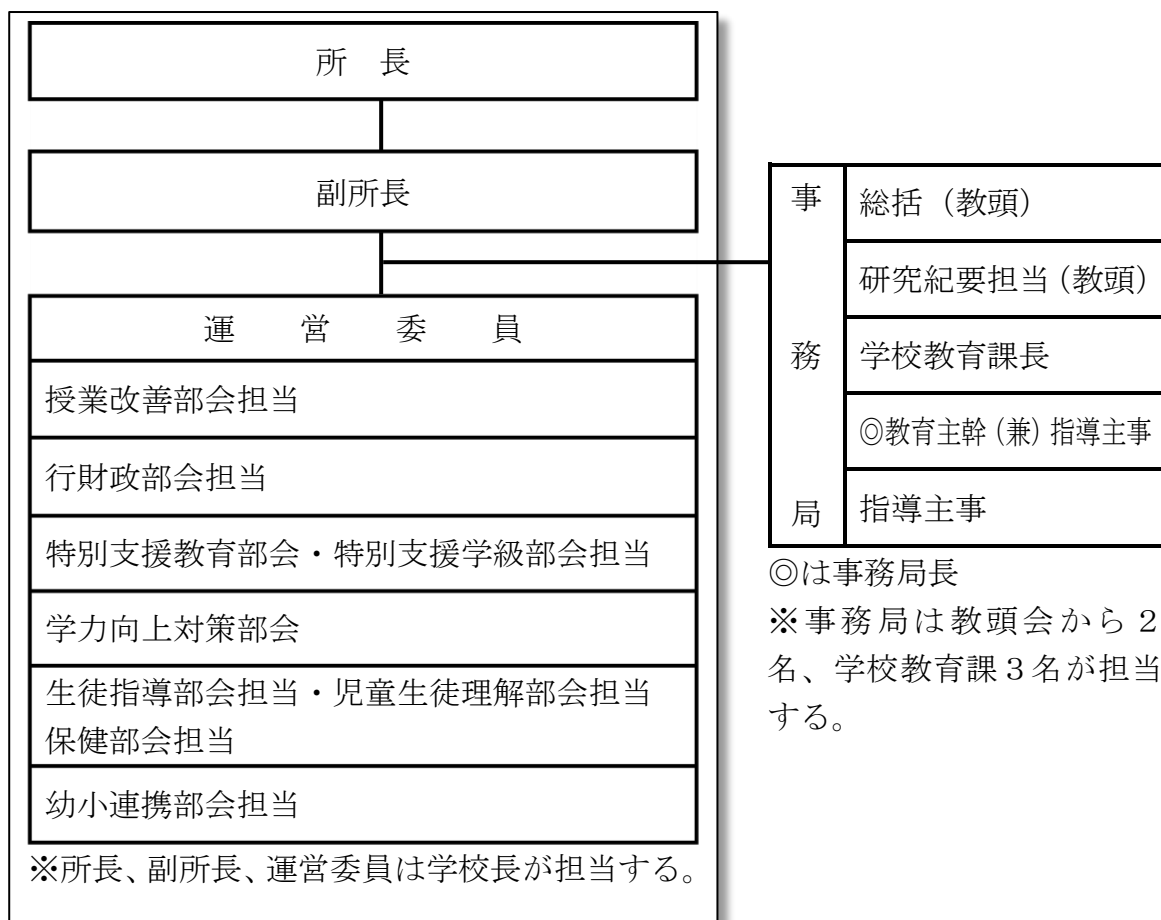


	自ら学びをつくる子どもの育成（3年次） ～子どもが主体的に学ぶ授業づくり，学級づくりを通して～				
	6月19日（水）	算数（1学年），社会（3学年）		午前授業 事後研 14：50～	
	7月 2日（火）	算数（2・4学年）			
	7月17日（水）	算数（5・6学年）			
	11月 8日（金）	町委嘱公開授業研究会		詳細は後日	
	自ら学び続ける子どもの育成（4年次）				
	6月19日（水）	6年（社会）	10月16日（水）	5年（理科）	
	7月10日（水）	2年（国語）	11月20日（水）	1年（体育）	
	9月18日（水）	4年（算数）	12月 4日（水）	3年（国語）	
	午前授業 事後研 後日送付の案内を確認ください				
	仲間と関わりながら、学び方を身につける子どもを育てる ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～				
	6月26日（水）	算数（3年2組）国語（5年1組）		午前授業 事後研 14：45～	
	7月17日（水）	生活（2年1組）総合（4年1組）			
	11月20日（水）	生活（1年2組）総合（6年2組）			
		「深い学びの実現を目指して～単元デザインを核とした授業づくり～」			
6月26日（水）		算数（病弱）	10月16日（水）	算数（6年）・算数（情緒）	
7月11日（木）		算数（3年）	11月12日（火）	国語（2年）・国語（5年）	
9月 5日（木）		算数（4年）・生単（知的）	12月 4日（水）	生活（1年）	
午前授業 事後研 15：30～					
	誰一人取り残さない 子供が育つ授業づくり				
	6月28日（金）	5年国語、6年算数（5・6年）		午前授業 事後研 14：30～	
	10月16日（水）	国語（3・4年）			
	10月30日（水）	国語（1・2年）			
	11月20日（水）	自立活動（1年学習室）			
	「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成 ～みんなが考え、みんなで深める～				
	6月19日（水）	算数（5年）	11月25日（月）	算数（6年）	
	6月26日（水）	算数（知的）	12月 4日（水）	算数（2・3年）	
	9月11日（水）	総合（4年）	12月11日（水）	未定（1年）	
	授業（2校時か5校時） 事後研 15：10～				
	生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成＜3年次＞				
	5月27日（月）	校内実践交流会（講師：三浦登志一氏）		午後授業 事後研 15：00～	
	9月 9日（月）	国語（1年） 数学（3年）			
	1月20日（月）	技術（2年） 道徳 or 学活（1年）			

・授業研の詳細については、各校から案内があります。

・各学校の校章です。由来や学校の概要について、R6かほくの教育【概要版】をご覧ください。

河北町教育研究所 令和6年度組織運営機構図



研 究 部	授 業 改 善 部 会	3 5 名所属
	児童生徒理解部会	3 5 名所属
	特別支援教育部会	3 3 名所属
	教育行財政部会	8 名所属

専 門 部	学 力 向 上 対 策 部 会	9 名所属
	生 徒 指 導 部 会	9 名所属
	特別支援学級部会	1 5 名所属
	保 健 部 会	8 名所属
	幼小連携部会	8 名所属

- ※ 研究部、専門部の部会長は、教頭が担当し教頭が所属する学校に事務局を置く。ただし、教育行財政部会、特別支援学級部会、保健部会は所属部委員から部会長を選出する。
- ※ 所員は、研究部のいずれかに所属し、専門部員は、各学校の代表者で構成する。

研究部会

授業改善部会

I テーマ 「学級づくりを土台とした授業改善」

II 活動の内容

1 日 時 令和6年8月1日（木）9：00～11：30

2 場 所 河北町立西里小学校 食堂

3 内 容

講話・演習

「今、求められている特別活動とその実際」

【村山教育事務所 高取 真実 指導主事】

【村山教育事務所 笹原 大輔 指導主事】

(1) 「R5文部科学省 教育課程各教科担当主事協議会」の説明

オンデマンド配信の紹介

【参加者の感想より】

- ・文科省が出している参考映像など紹介していただき、良い学びになりました。指導案事例のサイト等、日々の指導や授業研の参考になるサイト等を教えてもらうのは大変ありがたいです。

(2) 学級活動（1）と（2）・（3）の違いについて

○学級活動（1）

児童生徒が問題を発見、「議題」を選定。解決方法等について話し合い、折り合いをつけて、集団として「合意形成」を図る。（自分もよく、みんなもよい）ことを決める。

○学級活動（2）・（3）

教師が「題材」として、課題を設定。教師の指導に従って、解決方法や努力目標を一人ひとりが「意思決定」する。

【参加者の感想より】

- ・特別活動の中に、いくつかの項目がある事は何となく知っていたのですが、3つに分かれていた事、それぞれの内容は正直知らずにいました。改めて3つの内容を知ることができたので、これまでの学活・特活の実践の改善につなげていきたいです。

- (3) 小学校特別活動映像資料ダイジェストの視聴
(4) 演習「児童生徒が本気になって考える学級活動(2)の授業づくり
説明(5分) グループワーク(40分) 共有(5分)

学級活動：「心身ともに健康で安全な生活態度の形成」

(中学校：生活態度や習慣の形成)

題 材：「SNSの正しい使い方」

グループ毎(同学年の先生)に、様々な意見を交わしながら、SNSとの望ましい関わり方について一人ひとりが「意思決定」できるような授業展開を考える。

【参加者の感想より】

- ・ SNSやゲームについてどうしたら子どもたち自身が最後に自己決定できるかを考えた時に、今回教えていただいた授業作りの流れや身の周りの人材(ゲストティーチャー)を活用することを、他の先生方と一緒に考える中で学ばせていただきました。
- ・ 演習で先生方と指導案を考えることができ良かったです。普段1人で考え、1人で悩んでいることを、複数の先生方と話をすることで解消できました。また、他のグループの考えを共有でき、2学期の学習に取り入れていきたいと思いました。



Ⅲ 成果と課題

- 学級会での話し合い活動を望ましい流れで行うことにより「こどもは必ず変わる」という指導主事の言葉が印象的だった。今回の研修を通して、やはり授業改善のベースは、集団作り、学級経営にあること。そしてその重要性を改めて考え直す良い機会となった。
- グループ演習では、他校の先生方と活発な話し合いがなされた。子どもたち1人1人が「意思決定」できるような授業展開を実際につくっていくことで2学期からの実践意欲の高まりとなった事は大きな成果であった。
- ▲特別活動で使用したファシリテーションスキルを他教科で使えるように教科間の横断的な取組みの在り方について考えていく事が、今後も検討が必要である。

(西里小学校 川越 雅彦)

児童生徒理解部会

I テーマ「通常学級における児童生徒の

的確な実態把握及び効果的な支援について」

現在、通常学級において、配慮を要する児童生徒が増加している。そのような児童生徒の的確な実態把握をしていないため、効果的な支援につながっていなかったり、どのような支援が適切なのか分からなかったりする現状がある。今回、的確な実態把握、効果的な支援方法の2つを学ぶことをねらいとし、研修を実施した。

II 活動の内容

- 1 日 時 令和6年8月1日（木）9：00～11：30
- 2 場 所 河北町立溝延小学校
- 3 内 容 講話・演習

講師：山形市立蔵王第一小学校 教諭 伊藤 与奈 氏

（1）講話から

6つの視点から、テーマに沿って話をしていただいた。

- ①通常学級の現状
- ②通常学級における特別支援教育
- ③困り感に寄り添うとは
- ④実態把握について
- ⑤個に応じた支援について
- ⑥効果的な支援に向かうための校内体制作り

【実態把握のポイント】

- ・ 日常の行動から
(興味関心、行動パターン等)
- ・ 障がいの特性から
(検査や医療機関との情報共有等)
- ・ 今までの学び、育ち、家庭環境から
- ・ 性格や友達関係から

【効果的な支援について】

- ・ 「長期目標」…将来なりたい姿をイメージし、長いスパンで目標を立てる。
- ・ 「短期目標」…長期目標に向け、短いスパンで目標を決める。
- ・ 「教育課程における目標」…短期目標に向け、各教科における目標を決める。

↓

効果的な支援方法は、個によって違うため、個々の目標に応じた様々な支援方法を試しながら、児童生徒の実態に合った方法を見つけていくことが大切である。



(2) 演習から（模擬事例をもとに、ケース会議）

模擬事例をもとに、表に示した4つの流れに沿って、グループごとに演習を行った。特に、右記3と4に重点を置いた。

「3 行動の背景を想像する」では、児童生徒の見えている部分だけでなく、隠れている部分に対する想像力を働かせた。そして、子どもの実態や困り感をより深く探ることができた。

「4 ねらいに応じた支援方法を考える」では、グループでできるだけ多くの支援方法考えた。そして、出された支援方法の中から、児童生徒の実態とねらいに合った支援方法を2～3個選択し、実践する準備をすることができた。

模擬事例に対してグループで取り組むことにより、組織として対応する大切さを学ぶことができた。

【支援方法を考える手立て】

- 1 実態を把握する。
- 2 子どもの困り感（思い）を共有する。
- 3 行動の背景を想像する。
- 4 「ねらい」に応じた支援方法を考える。

(3) 振り返り（参加者の声）

- ・日々、配慮が必要な児童がクラスにいます。見えている行動と隠れている部分を、今後しっかりと見取って、声をかけていかなければと実感しました。演習では、一人よがりの思いではなく、他の先生とも支援の方法を交流し合って対応していくことが大事であると学びました。
- ・子どもの見方について、改めて確認できる良い研修会でした。対応に悩む子どもと接していると、どうしても「困った子だな」と考えてしまいますが、「その子どもが困っている」という視点で背景を理解することや、その子の困り感に寄り添うことが大切であることを再確認できました。
- ・悩みを抱えた時、一人で考え込まずにチームで話し合い、関わっていくことが大切だと思いました。個別の支援を組織的に取り組むことにより、様々なアプローチができるので、教員間で情報を共有していきたいと思いました。



Ⅲ 成果と課題

世の中や家庭環境等が複雑化していく中、今まで以上に児童生徒一人ひとりに寄り添った支援が必要になってくる。その支援が、より効果的なものとなるように、的確な実態把握のもと「チーム学年」「チーム学校」といった組織として対応することができるよう本研修で得た学びを活用していただきたい。

（溝延小学校 森 暢仁）

特別支援教育部会

I テーマ

「児童の学習・生活における自立を目指した
支援のあり方について」

II 活動の内容

- 1 日 時 令和6年8月1日（木）9:00～11:30
- 2 場 所 河北町立谷地中部小学校 食堂
- 3 内 容 **講話「特別支援教育に関わる先生方に
知ってほしいこと」**
講師 楯岡特別支援学校寒河江校
教頭 土肥 修 氏



(1) 特別支援教育とは・・・

「子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う教育」

- 具体的に動けるような、「足りない一声」をかけることが特別な支援。
- 校内のメンバーで行うケース会も大切だが、是非外部の支援（巡回相談等）を活用してほしい。
- 「特性」は変わらない。「実態」は変化していく。

(2) 継続的な特別支援教育を行うために・・・

個別の支援計画と、個別の教育支援計画・個別の指導計画

- 個別の支援計画は、その子のライフプラン。教育だけに関わらず、「その子の卒業後も活用できる」ような人生の履歴。
- 長期目標を明確に持つことで、「今の段階でこの子にどんな支援をしていくことが効果的なのか」という具体的支援が明確になる。

(3) 「障がい」の実態

通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の割合

- H24年＝6.5% → R4年＝8.8% 今はまだ増えているのでは？
- SLD4.5%、ADHD3.1%、ASD1.1%。行動面で困難を抱えているのは3.6%
- AD（愛着障害）の課題が近年増加している。特定の人と結ぶ愛着のきずながうまく結ばれていない。
- 薬物療法の効果が期待できるのはADHD。

(4) 保護者への支援

- ペアレントトレーニング、ピア・カウンセリング、メンタリング。
- 外部と連携して活用を。

(5) 学校種について

- 5種の障がいに対応する学校が県内に21校。
- 県内に「情緒障がい」のみを対象とした特別支援学校はない。
- 近年の傾向として、「知的障がい」と「情緒障がい」の児童生徒数が急激に増えている。
- IQが75程度以下が中軽度に該当する。
- 西村山地区は「就労継続支援」のサポートが厚い。

(6) 問題行動が発生する背景

- 「行動障がい」後発的なもの。本来ASDの障がい特性としては存在しない。
- 適切な関わり方や環境を整えると改善することができるもの。
- 多くの「気になる行動障害」はを誘発する原因は、私たちの指導に原因がある。
- 「苦手なこと」を克服することは、特性的にも難しいかもしれない。それよりも、「できること」「得意なこと」に目を向けて伸ばしていく環境づくりを。



(7) 感想より

- ・今まで「？」と思っていたことが、「そうだったのか！」と納得できたことがたくさんあった。
- ・資料の中で、障がいについて表にまとめていただき、違いや特徴など簡潔にまとめていただいたので理解しやすかった。
- ・強度の行動障害は、周りに原因があることを知った。そんなときは、自分の指導を考えなければならないと感じた。
- ・事前アンケートへの根拠に基づいた詳しい回答をいただき、大変参考になった。

Ⅲ 成果と課題

- 学校現場で子どもたちと接する中で、実践を通して疑問に思っていたような内容についてのお話が多く、聞いていて納得したり、具体的なイメージを持ちながら話を聞いたりすることができた。
- 障がいの「特性」と「実態」の話では、我々の関わり方で実態は変わっていくが、特性は変わらないということを再認識することができた。
- 関わり方の質で、子どもたちの「行動障害（後発的な障害で特性ではない）」を誘因する原因にもなると知り、自分の指導を振り返るきっかけになった。
- 事前アンケートへの根拠に基づいた詳しい回答をいただき、大変参考になった。
- ▲愛着障害についての現況も出てきて、対応の難しさが増している。外部資源との連携が今後さらに重要になってくる。積極的に活用を進めたい。

(谷地中部小学校 近松 浩)

教育行財政部会

I テーマ

「信頼に応える学校事務をめざして」

II 活動の内容

- 1 日時 8月1日(木) 9:00～11:30
- 2 場所 谷地南部小学校 コミュニティルーム
- 3 内容

(1) 講話 「河北町の農業の現状とこれからの農業のあり方」

講師 学校教育課長 宇野 勝 氏

① 河北町の農業のすがた

ア. 耕地面積

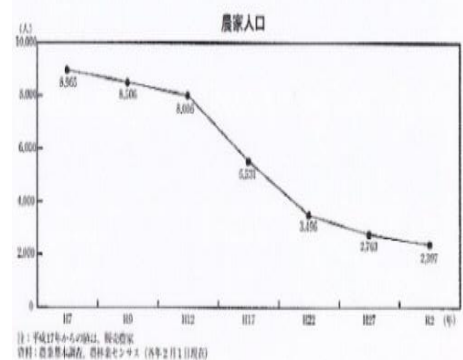
河北町全体の耕地面積は52.45km²で、最も割合が多いのは田で15.74km²である。

経営耕地面積も田が最も大きい。樹園地は溝延地区に多い傾向にある。



イ. 農業従事者

農家数は高齢化などにより年々減少し、平成27年から5年間で21戸(1.9%)減少傾向にある。農家人口も減少傾向にあり、令和2年で2,397人。農家人口のうち65歳以上の高齢者の占める割合は、平成27年が41%、令和2年が47.6%だった。



ウ. 農業生産額

令和元年度の町内総生産額は55,004百万円、うち5%が農業水産業となっている。

② 米(稲作)の動向

令和5年産主食用作付実績は888haとなっており令和4年の896haに比べ減少している。

③ 果樹の動向

果樹栽培面積は全体で平成27年は229ha、令和2年は198haとなっており、減少傾向にある。

④ これからの農業

食料・農業・農村基本法の見直し、持続可能な農業への取り組みが行われる。農業の担い手が減少傾向にあるため、子どもたちへ農業の文化を継承し、次世代の担い手を育成する必要がある。

(2) 大型備品（管理備品，教育活動備品）現有数の確認

教育行財政部会では「大型備品現有数一覧表」を作成し、毎年新たに購入した備品等の現有数確認を行っている。町内各学校の大型備品は学校間で貸し借りができる体制となっており、学校教育活動に非常に役立っている。さらに必要とされる大型備品の要望については校長会と連携しながら町に継続要望して各学校の教育環境整備に努めていきたい。

(3) 事例研修，情報交換

給与・旅費について、校内予算を有効に活用するための方策について、資料を持ち寄り研修した。

Ⅲ 成果と課題

- 学校で児童生徒が安全に生活し、教育活動が円滑に行われるためには、財務管理を通して、学校経営に参画する事務職員の役割も大きくなっていく。そのためにも、快適に学習できる環境を整備し、教育財産を適正かつ有効に活用できる、信頼に応える学校事務を目指して研究を進めた。その結果、部員一人ひとりの資質と力量を高めることができた。
- 河北町の農業について説明いただいた。農業の現状と、これからの在り方について重点となる事項について共通理解が図られ、大変有意義な研修になった。子どもたちへ農業や地域の文化を継承するため、地域交流学習事業へも行政職として積極的に参画していきたい。
- 事例研修や情報交換は、貴重な自己研鑽の場であり、同時に有効な事務連携の場となっている。事例の共有や課題解決に向けての話し合いを積極的行っていったことで、見逃しがちな小さな疑問も解消していくことにつながった。
- ▲財務会計システムを各校で使えるようになり、これまでよりも効率よく業務を行うことができるようになった。しかし、財務会計システムの操作方法や予算執行についての疑問点などを、これまでのように学校教育課の職員に直接相談することができなくなった。町予算に関する研修を引き続き設けていきたい。

(谷地南部小 高橋 花奈)

専門部会

学力向上対策部会

I 運営方針

河北町内の全児童生徒の学力をより一層向上させるため、課題意識を共有し、情報交換を行いながら授業改善に取り組む。特に今年度は、小中連携の視点から育成したい学力を検討し、各校の実態に応じた実践を行い、成果や課題を交流する。

II 活動の内容

1 第1回学力向上対策部会議

(1) 開催日 6月21日(金) 谷地西部小学校

(2) 内 容 部会組織、運営方針、事業計画の確認とグループ対話

①【グループ対話】学力とは何か

- ・狭い範囲で言えば、問題を解決する力。もう少し広げれば問題を解決するために、人と協力したり、聞いたり、自分から必要な解決方法につなげる力、コミュニケーション力など。
- ・将来生きていくうえで必要な力。基礎基本は知識技能だけではなく、話したり聞いたりなどのスキルも含めて確実に身に付けることが必要。また、自分自身の目標や自己調整力をも貫くものとして学力と捉えたい。
- ・自ら学んでいく力、習得した知識や技能など学んで得た力。分からない、できないから、知りたい、できるようになりたいと思い、どうしたらいいのかを考える力。
- ・自分の力で、目の前の課題を解決していく力。社会が日々変化する中、その変化に対応し、周りの人たちと協働しながら生きていくことができる力。

②【グループ対話】小・中学校における学びの系統性とは

- ・子どもの実態に応じたノートの取り方(考えのまとめ方)、話の聞き方等、指導しているが、他校ではどのように指導しているのか分からない。小中連携の前に小・小連携も必要。町内の小学校で学年ごとの担任で集まって話をするなど、各学校の課題やそれを踏まえた実践や取組みを交流する機会があるとよい。
- ・系統性の確認が不足しているのではないだろうか。例えば、「国語」で付けたい力が意識されず、同じような学習活動がただ繰り返されているだけという実態があるのではないだろうか。ただ、系統性は一つの目安であり、子どもの実態に応じた指導とのバランスが必要である。
- ・子どもたちが、小学校でどのような内容を学び、それが中学校ではどのような内容とつながっていくのか、確認しながら指導していく必要がある。そのため

には、小中が互いの授業を見合うこと、授業づくりについての情報交換も大切にしたい。

- ・小学校では、子どもたちが自然に話し合う、立ち歩いて友達に自由に聞くなどの学び方を取り入れている。そういった小学校での学び方（子どもの主体性を生かす手立て）が、中学校での指導とうまく接続できるとよい。
- ・タブレット活用が進んでいるが、タブレット活用の小・中の接続に向けての確認も必要である。小学校で育成しておくスキルの目安があると分かりやすい。

2 第2回学力向上対策部会議

(1) 開催日 11月14日（木）谷地西部小学校

(2) 内 容

①各校の学力向上対策の情報交換（グループ・全体交流）

- ・各校での学力向上に関わる取組みの成果・課題（アクションプランをもとに）
- ・成果や課題を受け、今後さらに取り組んでみたいこと（各学校で・町全体で）

②学力向上に関する情報交換

【今後、取り組んでいきたいこと】

- ・教科の学習の系統や学び方の系統について、積み上げられていない部分もあると感じる。担任している学年の学習内容が、上下の学年とどうつながるのかの確認を校内で進めていきたい。また中学校では、小学校からの学習の系統性を理解し、そのうえでレディネス等も活かした単元づくりに取り組んでいきたい。
- ・中学校での子どもたちの様子から、小学校で学んだことがうまくつながっている点と、そうでない点があると感じた。中学校進学に向け、小中の系統性を意識しながら、資質・能力をより明確にした指導の重要性を感じた。さらに、学んだ力を活用し、地域とのつながりやキャリア形成を見据えた学習も考えていきたいと感じた。

Ⅲ 成果と課題

○第1回目の部会で、「学力とは何か」というテーマでの対話を行った。その結果、言葉に対し抱くイメージは多様であり、めざす学力について教職員で対話し、方向性を確認することが、学力を高める土台として大切であることが確認できた。

○現在の子どもの学ぶ姿を踏まえつつ、これまで、そして、これからの学びの系統性を意識した授業づくりの大切さが確認できた。また、小・小連携として、町内で同じ学年同士での情報交換、各学校の課題やそれを踏まえた実践や取組みを交流する機会づくり等のアイデアも多く出された。前年度踏襲ではない、新たな挑戦も大切にしたい。

▲授業改善に向けた具体的な取組みについては、本部会で話し合われたことをもとに、各校の実態に合わせ、それぞれで取り組むことを確認した。その取組みを実施、評価、改善し、日々の授業を充実させていくことが求められる。

（谷地西部小学校 増川 秀一）

＜西里小学校＞

1 学力調査等の分析と課題

学力調査から見られる本校の課題

(1) 国語

- ・目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討すること
- ・資料として示されたメモについて、語句と語句との関係の表し方や図の意味を理解し使うこと。
- ・目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
- ・物語を読んで、人物像を具体的に想像すること。

(2) 算数

- ・直方体の見取図について理解し、かくこと。
- ・道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。
- ・割る数が小数である場合のわり算において、割る数と商の大きさの関係について理解すること。
- ・示された情報を基に、表から必要な数値を読み取って式に表し、基準値を超えるかどうかを判断すること。

2 学校で育成したい資質・能力

◎自分の伝えたいことを、十分な情報を加えて、適切にまとめること。

- ・情報を正確に読み取る力
- ・自分の考えや意見を的確に伝え、仲間と協働して課題に取り組む力
- ・目標達成に向け、協議し、粘り強く取り組む態度

3 資質・能力を身に付けるための主な指導・取り組み（授業改善）

- ・教師主導ではなく、自ら課題を見付け、友達と学び合いながら解決していく機会を増やす。
- ・交流できる場の設定・工夫をするなどして、対話が生まれる学び方を工夫する。
- ・伝えたいことを適切な言葉や文章でまとめる機会を意図的に設け、全ての教科における学習の基盤となる言語能力を継続的に育成していく。
- ・国語の学習において、文章の要約や心情、人物像を読み取ること、必要な情報を見付けることなどを大事に扱っていく。
- ・算数では、ミニテストなどで自分のつまづきを把握できるようにし、これまで以上に基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。
- ・各教科でのICT機器を効果的に活用した学習の推進に力を入れる。
- ・金曜日の学びの時間などで読書の時間を確保し、読解力の向上を図る。
- ・子ども理解を大事にした、あたたかな学級づくりを行う。

4 取り組みの振り返りと児童の変容

- ・学級づくりを大切にすることで、各学級に安心・安全な風土が育っている。
- ・子どもに任せる授業を推進し、子どもたち自身が見通しを持って授業を進める場面が出てきてはいるが、教師の出と待ちのバランスがつかみ切れていないので、引き続き授業研究を重ねていく。
- ・タブレット端末を、自分の考えを交流するためのツールとして当たり前のように活用するようになってきている。
- ・考えを記述して説明することに対し、各教科で押さえるべき用語を確実に習得させたり、読む経験・書く経験を意図的・継続的に積み重ねたりしていく必要がある。

<溝延小学校>

1 学力調査等の分析と課題

分析では、全国の通過率や平均と比較して、課題や強みを把握した。サンプル数の少ないデータに一喜一憂せず、本校で捉えている「育成したい資質・能力」を教師同士の対話によって言語化し、より具体的に教育活動をマネジメントしていく必要がある。

2 学校で育成したい資質・能力

令和5年度の話合いを基に、本校の児童の「強み（○）」と「課題（●）」を明らかにし育成したい資質・能力を検討し、育成を目指す資質・能力を「主体性」に絞った。

- 課題を自分事として捉えて学習に臨めるようになってきた。
- 授業と授業、授業と生活とのつながりが出てきた。
- 自分の言葉で自分の思いや考えを話すことができる児童が増えてきた。
- 友達の考えに耳を傾け、自分の考えとの違いに気づく、考えを広げるなど、一方通行ではない話合いができるようになってきた。
- 日頃の学習（授業・宿題・自学）を見てみると「やらされている」という雰囲気がある。
- 話すことはできるが、相手意識や目的意識が弱く、発表や発信する際に、はっきりわかりやすく話す力はまだ弱い。

主体性

「主体性」の育成（育成したい資質・能力）に向けて、具体的な手立てをとり実践

3 資質・能力を身に付ける

- (1) 育成したい資質・能力（主体性）を明確にしたカリ・マネ表づくりと振り返り
 - ・職員同士の対話の場を設け、「主体性」の具体的な手立てや振り返りの「言語化」をした。Ex) ホワイトボードを活用し事後研・ケース会議の可視化
- (2) 資質・能力（主体性）をより具体的に学級や児童の実態に合わせる手立て。
 - ・目標 単元構成 課題 見通し 情報収集 整理・分析 効果的な学習形態・学習材 ICT 活用 まとめ・表現 振り返り等の言葉を、教師自身の言葉で語り合うことで、「主体性」の意味を明確にしようと試みた。
- (3) 地域や学校で育成したい資質・能力（主体性）を共有
 - ・学校運営協議会に学級担任全員が参加した。「学校教育目標を具現化するためのカリキュラム・マネジメントプラン」を囲んだワークショップを実施した。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・授業研後「課題」「強み」などを互いに可視化・言語化することは意義があった。改めて、「主体性」を具体的な言葉で語り合うことが、授業改善の取組みにつながった。
- ・職員室で「主体性」が、具体的なエピソードベースで語られるようになった。学校生活や学習活動における児童の作文（振り返り）や会話内容の変容が増え、その変容を学級通信等で発信する学級も増えている。

＜谷地中部小学校＞

1 学力調査等の分析と課題（全国学力調査から捉えた本校の課題）

【国語】

- ・考えや感想をまとめ、伝え合う力
- ・目的や意図に応じて伝え合う内容を検討する力
- ・文章の中で漢字を正しく使う力

【算数】

- ・除数が小数の時の除数と商の大きさについての理解と計算
- ・道のりと時間の関係、速さの意味の理解
- ・折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを言葉と数を用いて記述すること

2 学校で育成したい資質・能力

- ・前に踏み出す力（主体性）
- ・チーム力（協働・対話）
- ・考え抜く力（解決・創造）

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・学校研究における授業改善の視点を生かして、日々の授業を行う。
- ・基礎学力の充実を図るとともに、子どもたちが主体的で協働的に学ぶ探究的な学習の授業改善に力を入れる。
- ・各教科でねらっている「資質・能力」と「生活科」及び「総合的な学習の時間」の学習・活動内容を結び、カリ・マネ表を作成、活用し、教科横断的な学習に取り組む。
- ・アクションプランを作成・共有・活用することを通して、日頃からつけたい力や資質・能力を意識した指導を行い、授業を改善していく。
- ・I C Tを活用し、意欲の向上、教材や意見の可視化、個別の探究活動を進めていく。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・文章を読むことを大切にし、文字に触れる機会を増やすことで、文章を読むことへの抵抗が少なくなっている。
- ・話し合い活動を通して、自分の考えを持つこと、友達の考えを聞くこと、自分の考えをアウトプットすることに慣れ、考えを広げたり深めたりする経験を積み重ねている。
- ・単元計画を児童と共に作ると同時に、何を学ぶのか、何のためにこの活動をするのか、どのような力をつけるのかについて確認し、取り組むことで、課題を自分事として受け止め、学びを深める姿が見られるようになった。
- ・個人総合を通して、自分の課題に没頭して挑戦する姿が多く見られるようになり、他の教科の学習にも意欲を持って取り組むことができるようになった子が増えた。
- ・個⇒協働⇒個のスタイルの授業を通して、個の力、チームの力が育ってきている。

＜谷地南部小学校＞

1 学力調査等の分析と課題

【国語】・考えが伝わるように、書き表し方を工夫して書くことに成果が見られる。

- ・集めた情報を、整理・分析することに課題が見られる。
- ・およそ一読して内容を捉えることに課題が見られる。

【算数】・問題場面を的確に捉えることに課題が見られるが、考え方のヒントが与えられている場合には、それを参考に解決できる。

- ・必要な情報を集め、整理・分析することに課題が見られる。

2 学校で育成したい資質・能力

- (1) 大事な言葉を落とさずに、話し、聞き、書き、読む力
- (2) 相手や目的に応じて、言葉を考えて使う力
- (3) 目的に応じて、集めた情報を、整理・分析し、検討する力

3 資質・能力を育成するための指導、取組み

- ・物語を選んで読み、お気に入りの場面を見つけながら、想像をふくらませて読めるようにする。その際、必要感のある対話の場面を位置付ける。
- ・語彙を増やし、自分の思いや考えを相手に伝わるように言語化できるようにする。そのために、体験を重視した学びを積み重ねる。
- ・伝えたいことにぴったり合う言葉（語彙）を増やす。（辞書の活用）
- ・上手な説明の仕方を授業内で共有する。
- ・目的を明確に持ち、何のために調べるか、常に確認しながら進められるようにする。
- ・相手を意識し、何を伝えるのか考えて、伝える言葉を選べるようにする。
- ・目的や相手に応じて、必要な資料を選んだり、表現の仕方を検討したりしてまとめられるようにする。
- ・目的や相手に応じて、選ぶ資料やそれによって伝わる効果等を検討しながら、発表を繰り返すようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・相手や目的を明確にした単元づくりに取り組んだり、学習のねらいを達成させるためのきめ細やかな手立てを工夫したりしたことで、児童の学習意欲や学習内容の定着に少しずつつながっている。ただし、前学年までの学習の振り返りや学び直しが必要な場合もあり、学習の系統性をより意識しながら指導する必要がある。
- ・各教科の単元に関連する図書コーナーを教室の一角に設けるようにしたことで、図書資料を学習に生かす児童の姿も増えてきている。
- ・日常の会話の中で、相手に伝えるために不足している事柄やふさわしくない言い方などについて、児童に問い返して考えられるようにすることで、使える語彙が少しずつ増え、会話の質も高まり始めている。
- ・自分にとって必要な情報かどうかを常に振り返り、学んだことが実際の生活に生かされたと児童が実感できるように、学校教育全般で繰り返し指導を続けていく必要がある。

<谷地西部小学校>

1 全国学力・学習状況調査の分析と課題（本校のよさ○と課題▲）

【国語】○目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。

○登場人物の相互関係や心情などについて、叙述や描写を基にとらえることができる。

▲資料を提示するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。

▲学年別配当漢字を文の中で正しく使うこと。

【算数】○数量の関係を□を用いた式に表すことができる。

○直径の長さ、演習の長さ、円周率の関係について理解している。

○角柱の底面や側面に着目し、五角柱の面の数とその理由を言葉と数を用いて記述できる。

▲示された情報をもとに、表から必要な数値を読み取って、式に表し、基準値を超えるかどうかを判断できるかどうかを見ること。

▲球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すこと。

【質問紙】○朝食をきちんと食べている。将来の夢や目標をもっている。規範意識が高い。

▲休日の家庭学習時間が短い。動画視聴時間が長い。読書時間や新聞を読むことが少ない。

2 学校で育成したい資質・能力

～これからの時代を自分らしく、自分の思いをもって生きていくために～

◇自ら行動する力【自律と主体性】

◇人を大切にする力【尊重と対話】

◇考え抜く力【挑戦と創造】

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・単元計画の中に目指すゴールと育てたい資質・能力を児童に示し、学習の見通しをもつことができるようにする。
- ・学年に応じた両間接指導を意識した授業展開を行い、子どもを見取ることで、個に応じた支援を考える。
- ・個別最適な学びにつながる学習材の精選や環境設定、タブレットの有効活用をする。
- ・振り返りを価値づけ、次の学習へとつなげていく。
- ・課題解決に向けて、情報を整理したり選択したりして、自分の思いや考えをもつことができるようにする。
- ・自分の思いや考えを表現したり、自分の考えと比べながら友達の話の聞いたり、相手を意識した表現の場の設定をする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・高学年は自分たちで学習をつくるという意識が高くなっている。低学年もリーダーを中心に学習を進めることに取り組み、次第に自分たちで授業を進めることができるようになってきている。
- ・わからないことを友達に聞いたり、解決の方法を選んだりして取り組むことができるようになってきた。
- ・興味のあることには最後まで取り組むが、不安なことやわからないことに粘り強く取り組むことに課題のある子どもがおり、苦手なことでも、できることを選択して取り組めるように支援していく。
- ・友達の意見を否定せず、まずは受け止められるよう、人を大切にする態度を育んでいく。

＜北谷地小学校＞

1 学力検査等の分析と課題（N R T・全国学調から見てきた課題）

①国語

- ・複数の情報から内容を要約し、条件に従って文章の構成を考えながら自分の言葉で書く力
- ・長文でも内容を的確に捉えて読み取る力

②算数

- ・図や表、言葉などから問題場面を的確に捉え、目的に応じて数の処理をする力
- ・生活場面と関連付けながら多様な考え方を見出し、生活に活かそうとする力

③質問紙

- ・算数の問題の解き方が分からないとき、あきらめずにいろいろな方法を考えようとしている児童が少ない。
- ・算数の問題が解けたとき、別の解き方も考えてみようとする児童が少ない。

2 学校で育成したい資質・能力

- ・目的に応じて文章の構成を考えながら文章を書く力
- ・物事に対する見方や考え方を筋道立てて表現する力
- ・一人ひとりが自分の考えを持ち、みんなで考えを深める力（研究テーマ）
- ・児童が主体となり、協働的に深く学び合う力（複式学級を意識した授業づくり）

3 資質・能力を身に付けるための指導、取り組み

- ・あらゆる機会を捉え、言語活動能力の育成に努める。
- ・授業の振り返りを必ず毎時間行い、それを次時に活かせるように手立てを工夫する。
- ・複式学級の授業を積極的に参観して授業づくりについて学び、指導に活かしていく。
- ・児童同士で自分の考えを出し合ったり聞き合ったりしながら、考えが深められるように場の設定を工夫する。
- ・カリマネ表を作成し、学校の教育活動を教科等横断的な視点で計画し、PDCAサイクルをきちんと回しながら展開していく。
- ・話し手の目的や意図と聞き手の求めていることに応じて、話す際の情報を集め、分類したり関連づけたりして伝え合う内容を考えることができるようにする。
- ・要約する活動等を通して、必要な情報を選び、構成を考えながら表現できるようにする。
- ・なぜそう思ったり考えたりしたのかを叙述をもとに考えさせるようにする。
- ・誤答も大切にし、間違った理由についてもじっくりと考えさせ、図や式、言葉などで説明ができるようにする。

4 取り組みの振り返りと児童の変容

- ・授業では勿論のこと、学校行事や特別活動などにおいても言語活動能力を養うための指導を意識して実践したことで、少しずつ言語能力がついてきた。（カリマネ表の利用）
- ・授業の振り返りを継続的にできなかったり、口頭での簡単な振り返りが多くなったりしたこともあったが、児童は振り返りを自分の言葉で書いたり語ったりできるようになってきた。また、具体的な言葉で振り返りをさせたことで、学習した内容を再確認したり、友達のよい考えを共有したりすることができた。
- ・場の工夫や学習形態の工夫により自分の考えを自分の言葉で表現できる児童が増えてきた。
- ・児童の発言やつぶやきを指導者がうまくコーディネートすることで、児童同士で学び合う姿が見られるようになってきた。（教師の出）

＜河北中学校＞

1 全国学力調査等の分析と課題

- ①基礎・基本と忍耐強く考える力が不足している。
- ②何を問われているか正確に理解できず、根拠に基づいた説明や記述に苦手意識がある。

2 学校で育成したい資質・能力

【知識・技能】

- ア 語彙力を含めた基礎基本の定着に取り組み、課題解決に活かす力
- イ 情報を的確に読み取り活用する力

【思考力・判断力・表現力】

- ウ 理解したことを根拠・理由を明確にしながら自分の言葉で相手に伝わるよう積極的に説明・発信できる力（対ひ場面の意図的設定）
- エ 学習事項や既習事項をを、教科や学年を超えて関連・統合して考える力

【学びに向かう力・人間性】

- オ 目標やゴール達成へのステップを理解して粘り強く学習に取り組み、振り返りを通して自己肯定感を自覚できる力
- カ 向上心を持って自らの学習を調整しながら学び、将来に活かす力

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み（特に重点として）

- ア 各教科と学年で必要に応じたドリル学習の時間設定と定着の工夫
- ア **NRT・CRT** アシストシートを確実に活用
（昨年度から1, 2年生は3学期実力テスト→定着確認と補充のため**CRT**に変更）
- アウ 学習指導部から提案し掲示している「学習の約束」を活用した節ごとの重点掲示
- アウ 「話し方」・「聴き方」のスキルを身につけるための工夫と基本話型の提示
- アウ デイリーを毎日最後まで書き切ることの徹底
- アイウ **ICT** 機器の効果的活用と研修
- アイウ 付箋紙を活用した学習の推進（赤ペンで直して青丸をつけることからの脱却）
- ウエ 対話を意図的に取り入れた単元設定（学校研究との連携）
- オ 単元を貫くゴールと、本時の課題を明示した授業
- オカ 自己調整力をつけるための振り返りと場の吟味
- その他 全教員（担任、教科担任、部活動顧問等）での「安心して自己表現ができる集団作り（居場所作り）」の強化

4 取組みの振り返りと生徒の変容

- 職員全員でアクションプランを通し生徒のことをたくさん話し合う機会を設けることができた。（学年会、指導部会、教科部会、研修会、職員会議）それによって**PDCA** サイクルが機能し、教師側の意識の高まりが見られ、生徒に良い効果を与えた。
- ゴールを明確にした単元構成の工夫（3年目）をすることで、何のためにどういう学びをしていくのかを生徒が見通しと課題意識を持って更に学習する姿が見られた。
- 具体的なスキルを身につけさせることで、「話す・聴く」力が昨年度よりも向上した。
- ▲基礎・基本につながるドリル学習がまだ不足している。計画的な取組みがさらに必要である。（○教科で賄えないところは学年課題で補充する学年も見られた。）
- ▲**ICT** の活用は進んでいるが、研修を含めさらに推進していく必要がある。ただし、**ICT** ありきではなくあくまでも効果的な活用を目指して吟味する必要がある。
- ▲学習においても大きな土台となる学級づくりにより力を入れていく。人手不足が否めない中、全職員が意識的に取り組むことで安心して自己表現ができる集団につなげる。

生徒指導部会

I テーマ

「健全な児童生徒の育成に向けた対応の仕方と 規範意識の向上を目指した情報交換の充実」

II 活動の内容

1 第1回生徒指導部会（情報交換）

(1) 日時 令和6年7月9日（火） 河北町立北谷地小学校

(2) 内容

① 河北町教育委員会ご指導（鈴木玄輝指導主事より）

- ・山形県は、全国の中でもいじめの認知件数が多い。しかし、悪いことではない。子どもたちに目を向けている。保護者から声を出してもらっている。
- ・不登校に対しては、対応を大事にしてほしい。日々の授業や行事づくりなども不登校の未然防止につながる。

② 生徒指導の「小中連携」について（河北中より）

- ・中学校では、トラブルを通して問題を解決する力を育てることが大事だと捉えている。小学校のうちに、問題に向かう力、解決する力を育ててほしい。

2 第2回生徒指導部会（講話）

(1) 日時 令和6年12月13日（金） 河北町立北谷地小学校

(2) 講話 「不登校児童生徒の強みを生かした解決の一步」

～解決志向の家族支援～

(3) 講師 山形大学地域教育文化学部 教授 佐藤 宏平 氏

(4) 内容

＜山形県の不登校の現状＞

令和5年度の不登校児童生徒数は、小学生785名、中学生1554名。
過去10年以上にわたり、小学校、中学校ともに、過去最多を毎年更新中。
ただし、全国ではトップ5に入る少なさ。（令和4年度は全国2位の少なさ）

＜不登校の「ヨコの見立て」～背景による分類～＞

- ① 分離不安タイプ（低学年に多い、養育者と分離することに強い不安）
- ② 家庭環境タイプ（マルトリートメント型、溺愛型、期待過剰型、短期型）
- ③ 良い子の息切れタイプ（優等生、真面目、過剰適応で心が疲労）

- ④ ドロップアウト型（スクールボンド希薄型、反社会的、非行、怠学優位型）
- ⑤ その他（教員や学校との相性、いじめ等、発達障害や精神障害が背景）

＜不登校の「タテの見立て」～再登校へのプロセス～＞

今、子どもがどの段階にあり、その子どもに適切な次の課題は何か。

① 葛藤・混乱→安定期の時期

最も身近な家族に介入する段階。家族との良好な関係構築が課題。

② 活動範囲が拡大する時期

自宅から戸外へ活動範囲が拡大。さらに学校的なものへの接触へ。

③ 学校への接近（周辺→中心）時期

夜間登校→別室登校→教室復帰 学校のスタッフの対応が中心となる時期。

＜解決志向の家族支援＞

問題（うまくいっていないこと）よりも、解決（うまくいっていること）に、焦点をあてる。今ある解決を喜びつつ、一歩先を見据えるアプローチ。

① 信頼構築が鍵

ア 保護者の疲弊、傷つきに十分留意する。

イ 犯人捜しをしない。

② 問題志向よりも解決志向

ア うまくいっていないこと（問題、悪循環）

イ うまくいっていること（例外、良循環）

ウ 内的リソース（強み、ストレングス）

③ 保護者の語る物語に耳を傾ける

保護者こそが当該児童生徒を最も良く知る専門家であるという姿勢。

④ 大きな目標ではなく、小さな目標から始める。

⑤ 保護者が「できること」の中から、最も「やるべきこと」に近いものを探す。



Ⅲ 成果と課題

- 「いじめ・不登校」に対する具体的な取り組みについて情報交換することができた。
また、山形大学の佐藤宏平先生から「不登校の2つの見立て」と「解決志向の家族支援」について助言をいただいたことはとても有意義だった。
- ▲ 不登校のケース会議等では、「問題（うまくいっていないこと）よりも、解決（うまくいっていること）を増大させる視点を持つ」ことが重要である。

（北谷地小学校 高橋 朋昭）

特別支援学級部会

I 運営方針

自立活動の指導について、日頃の自立活動の指導に生かすことができるような研修の場を設け、その概念や捉え方を再確認するとともに理解を深め、本部会所属教員の資質向上を図る。

II 活動の内容

特別支援学級部会研修会

1 日時 5月24日(金) 15:00～16:30 河北町役場301会議室

2 講師 山形県立楯岡特別支援学校大江校 佐藤 理果子 教諭

「自立活動の指導について」

3 講話内容

(1) 自立活動とは

「障がい」の概念(障害者基本法)

1 障害者

身体障害、知的障害、精神障害(発達障害含む。)、その他の心身の機能の障害(以下「障害」と総称する。)がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。

2 社会的障壁

障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のものをいう。(段差、納得していないのに入院させられる、子ども扱いされるなど)

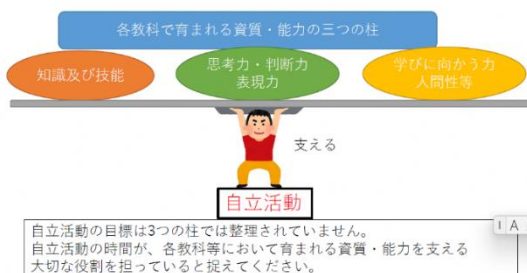
自立活動の目標

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。(特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領 p199)

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 p48)

Q1 自立活動って教科ですか？

「自立活動は」特別支援学校、特別支援学級、通級による指導の教育課程において、特別に設けられた指導領域です。



Q2 自立活動はいつ指導するのですか？

特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室では、教育課程の中に必ず取り入れることとして各校種の学習指導要領に示されています。

- 学校の教育活動全体
- ① 自立活動の時間における指導(自立活動の時間を設定)
 - ② 各教科等の時間における指導
・学習場面や生活場面で自立活動の指導を行う。

※自立活動の指導は学校教育全体を通じて行うものであり自立活動の時間における指導はその一部です。|

留意点 障がいの状態は一人ひとり異なる

→必然的に、一人ひとりの指導目標・内容・方法も異なる

→指導に当たっては、個別の指導計画を作成する

(2) 自立活動の指導計画と実践

① 実態把握

ア 収集する情報の内容

□病気等の有無や状態 □生育歴 □基本的な生活習慣 □人やものとのかかわり
□心理的な安定の状態 □コミュニケーションの状態 □対人関係や社会性の発達
□身体機能 □視覚機能 □聴覚機能 □知的発達や身体発育の状態 □興味・関心
□障がいの理解に関すること □学習上の配慮事項や学力 □進路 □家庭や地域の環境等

イ 情報収集の方法

- ・児童生徒のニーズ→興味・関心、悩みや願い、得意なことや苦手なこと
- ・保護者のニーズ→これまでの様子、悩みや願い、子どもの得意・不得意
- ・児童生徒の日常の姿→学校生活や学習、課題場面での様子、対人関係等の観察記録
- ・児童生徒の提出物→ノート、プリント、テスト、作品等にみられる特徴やつまずき
- ・他の教職員→交流学級担任や学年担任、他の特別支援学級担任、教科担任、養教等
- ・検査結果→知能検査、学力検査、専門機関の客観的情報
- ・その他関係機関等の立場→心理学的立場、医学的な立場、福祉施設の関係者等

留意点 実態把握や情報収集が多岐にわたって十分に行われていないと指導できない。

② 課題把握と目標設定

- ・本人のニーズの反映・現在の生活や将来像とのつながりを考慮 ・できるだけ複数の教師で連携して検討
- ・つまずきのもととなっている基本的なところから
- ・実現可能な、次につながるような目標設定優先順位をつけ、目標を絞る ・子どもを主体とした具体的な表現で文章化 ・長期的・短期的な視野で

③ 具体的な指導内容・方法の設定

- ・子どもの興味関心、得意なことを活かす ・無理のない課題配分、時間配分
- ・抵抗感、二次的障がいへの配慮 ・意欲を高め、自己有用感、達成感を味わえる工夫
- ・場の設定、教材・教具・補助具、教師のかかわりから手立てを検討
- ・学びやすい個々の学習スタイルに応じた手立て・手立ての内容や量を適切に設定

4 演習 (3～4人グループで)

①実態把握 ②課題の抽出 ③目標設定 ④指導内容の設定 ⑤グループ代表発表

Ⅲ 成果と課題

特別支援学級において自立活動は必ず組み入れなければならない指導領域であり、児童の実態に応じていかに指導していくかは教師の裁量に委ねられているところである。今回の研修では児童の実態・課題把握と目標設定に至るまでの手法やその大切さを再確認できた。また、複数人での演習を通して指導内容や目標達成のための手立てや工夫について話し合っ

て学んだことをこれからの自立活動の指導に役立てていきたい。

(北谷地小学校 阿部 禮一郎)

保 健 部 会

I テーマ

「養護教諭の執務の向上」

II 活動内容

第2回保健部会 【研修会】

- 1 日時・場所 令和6年10月22日（火）

14:30～16:30 河北町役場301会議室

- 2 講話 「疑似体験を通して気になる子への理解を深めよう」

- 3 講師 花笠ほ一ふ隊 代表 古澤 薫 氏 他1名

「花笠ほ一ふ隊」（知的・発達障がい理解啓発キャラバン隊）

知的・発達障がいがある人の思いや現状をわかりやすく楽しく伝え、知的・発達障がい者のことを理解してもらいたいという思いで活動している。

これまで、学校（児童・生徒だけではなく教職員向けにも）・検察庁・警察学校・消防学校・市役所など様々な団体に講演してきた。また、山形県にとどまらず、青森県・秋田県・宮城県・福島県・新潟県・群馬県・埼玉県・愛知県など各地で活動している。今年の6月には疑似体験の公演を受けた人数の累計が1万人を超えた。

4 内容

（1）知的障がい者

覚えること、言葉で話すこと、聞くこと、みんなに合わせて動くことが苦手。でも何もわからないわけではない。からかわれたり、笑われたり、叱られたりしたら、悲しい気持ちになる。

目が不自由な人には…白い杖が必要

耳が不自由な人…字幕が必要

脚が不自由な人には…車椅子が必要

知的発達に不自由な人には…理解ある人が必要

知的障がい者が地域で住みやすくなるには、少数の専門家より多数の理解のある人がいることが大事。「100人いれば100通り」の「その人に合った」支援方法が必要である。

（2）**疑似体験1** 「さくらんぼ」「ボール」「ちょっと」「ちゃんと」の絵を描く

「さくらんぼ」「ボール」はすぐに描くことができるが「ちょっと」「ちゃんと」はどう描くのか戸惑い、すぐに描けない。絵に描けなかった人や描けたけど戸惑った人は、知的障がいがある人が何かを頼まれたとき、自分は何を求められているのか、何をすればいいのか理解できずに何もすることができない状態と同じ。「絵に描けない言葉は理解できないと思いなさい。」

曖昧な言葉ではなく、具体的にわかりやすい表現で伝えることが大事。



例：「ちょっと」は、量？ 時間？ 人を呼んでいる？

「ちょっと待って」→「〇分まで待って」など具体的に伝える。

- (3) **疑似体験2** スクリーンに出された文を10秒見て覚えて、覚えた文書を紙に書く

「天使のようにキラキラ輝く我らは花笠は一ふ隊」→これは覚えられる。

「形美にヤヘヤヘまアはタカぼ一ふ鯛」→意味のない文章は覚えられない。

知的障がい者は文字は読めるけれど書けない。覚えたつもりが思い出せない。文字を意味として理解できない。

- ・言葉がどこで途切れるかわからない。 ・意味のある言葉なのかわからない。
- ・一文字一文字ゆっくりとしか読めない。 ・必要な文章がどこにあるか探せない。
- ・一度目を離すと読んでいた文章に戻れない。 ・周りと比べて自分だけができない。

「分かち書き」をすることで読みやすくなる。(例：今日は カレーを 食べました。)

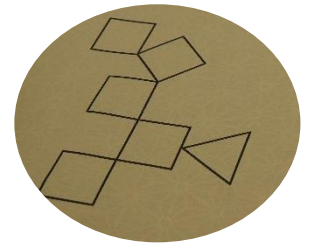
- (4) **疑似体験3** 軍手を2枚つけて、指先を緩めてお花紙で花を作る。

指先を思うように使うことができずイライラ。きれいなお花紙にならない。時間がかかる。発達障がいがある子どもの中には、指先を器用に動かせない子どもがいることを理解する。

- (5) **疑似体験4** 2人組で、1人が見た図形を言葉で説明し、相手に描いてもらう。

人によって理解が違うため、言葉で説明して、同じ図形を描くことは難しい。(大きさは？ どんなイメージ？)

言葉だけで、正しく伝える(理解する)のは難しいことを知る。



Ⅲ 成果と課題

○障がいのある人は、日常生活のいろいろな場面で戸惑っている状態(感覚や気持ち)があることを疑似体験を通して体験させていただけた。自分を基準にしてしまいがちだが、感じ方も捉え方も人それぞれである。「100人いれば100通り」であることを肝に銘じて関わっていきたいと考えた。

○感覚鈍麻、視覚過敏、聴覚過敏、ディスレクシアなど生きにくさを抱えている人がいる。支援ツール(オリジナルルーラーやサングラスなど)の活用はもちろんだが、読みやすい字体(ユニバーサルデザインフォント)の活用や分かち書きや振り仮名の使用など取り入れていきたいと思う。

○障がいをもつ人の日常生活での困り感について、わかりやすく体験させていただき、とても勉強になった。手先の不器用さや伝えたいけど伝わらないもどかしさなどを自分で経験することによって、障がいへの理解はもちろん、どのように支援していくと良いかがより明確になった。

▲「ちょっと」や「ちゃんと」などあいまいな言葉を使ってしまうので気をつけなければならない。

(溝延小学校 菊地 紗瑛)

幼小連携部会

I テーマ

「幼児教育と小学校教育のつながりのあり方について」

II 活動の内容

1 第1回幼小連携部会

(1) 日 時 令和6年6月11日(火)

13:35～16:30

(2) 場 所 河北町立谷地南部小学校

1年教室・食堂

(3) 内 容

【授業参観】

・1年 生活科「あさがおをかんさつしよう」 指導者 菅野 文香 教諭

・2～6年 自由参観

【講 話】 「“ともに” “つなぐ” 幼小連携のポイント」

村山教育事務所 笹原大輔 指導主事



① 幼児は、遊びを通した直接体験の中で、諸感覚を大いに働かせ、自分なりに試したり工夫したりしながら活動に没頭する経験を通じて、心身の発達が促されていく。遊びを中心とした生活の中で、育まれた好奇心や探究心、粘り強さ、協同性や感受性等の資質・能力が、小学校以降の教育においてどのように発揮させるのかを見通しつつ、今後は、幼児教育の視点から「子どもの育ちと学び」について小学校側と組織的に意見交換をしていくことが求められる。

② 生活科は、一人ひとりの思いや願いを実現していく一連の学習活動の中で、児童が自発性を存分に発揮し、対象への気づきを得たり見方や考え方を生かしたりしながら、よりよい生活を自ら創造していくことを目指している。幼児教育と非常に近い方向であり、低学年の教育課程を編成する上でも、大切な視点と言える。充実した活動や体験の中で得られた喜びや自信は、生活科の学びに留まらず、他教科や中学年以降の学び、さらには、教室を越えた生活の土台となっていく。

(4) 感 想

- ・全学年を公開していただいたことは大変ありがたかった。幼児期で身につけた力が、小学校入学後、学年が上がるにつれどのように確かな学びにつながるかが見えたように思う。
- ・園の先生と小学校の先生方が、悩んでいたり考えることが同じだったり、共有出来る部分がたくさんあり、充実した研修になった。

2 第2回幼小連携部会

(1) 日 時 令和6年11月26日(火) 前半 9:30～11:00
後半 14:30～16:40

(2) 場 所 ひかり幼稚園、河北町役場

(3) 内 容 【保育参観】 自由活動 0～5歳児

【講 話】 「遊びは幼児期にふさわしい学び」

山形県教育局義務教育課 倉岡寿幸 指導主事

① 乳幼児期は、基本的な生活行動が自律し、言葉や運動、人間として生きるために必要な、極めて基本的な様々な能力が育つ時期。同時にその能力を試したがる時期。人生で最も大きく自発性が発揮される時期。つまり幼児にとって「自発的な活動としての遊び」は、発達的に極めて自然なものである。

② 自由に遊べる環境が十分あるほど、且つ、指導者の需要的な関わりがあるほど、遊び込む経験が多い。遊び込む経験を多くする方が、協調性、がんばる力、好奇心、自己主張、自己統制の力が育っていることが分かってきている。

(4) 感 想

- ・今回参加できなかった指導者にも次回参加してもらい、小学校の先生と話す機会や、自身の保育の質向上にも努めてもらいたいと思った。
- ・「幼児期の終わりまでに、育ってほしい10の姿」を知り、保育園と小学校で重なる点が多くあり、改めてつながりの重要性を感じた。
- ・小学校でも、生活科で環境と援助が必要な場面がたくさんあるので、今後も幼稚園の先生方から学んでいきたい。

Ⅲ 成果と課題

○園と小学校の教諭が、双方の学習・活動を参観し、「幼児期の終わりまでに、育ってほしい10の姿」を子どもの姿を通して語ることができたのは大変有意義だった。他学年の担任にも周知していきたい。

○幼児期の主体的な「遊び」を架け橋期の学びにつないでいくことの重要性を改めて学ぶことができた。「遊び込む経験」を多く積んだ子どもは、「学びに向かう力」が高いということを知り、低学年での様々な体験が重要であることを認識できた。

▲幼児期の自発的な遊びで培った好奇心や主体性等を、小学校の低学年にとどまらず、中学校まで、持続させるために何が大切かを、今度の幼小中の連携の中でさらに推進していきたい。



(谷地南部小学校 荒木 康子)

公開授業研究会

西里小学校

I 研究主題

自ら学びをつくる子どもの育成（3年次）

— 子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して —

II 主題設定の理由

「自ら学びをつくる」とは、①主体的に対話を重ねて考えを深めること、②新たな課題に粘り強く取り組むこと、③子ども自身が学ぶ力を身につけていくこととし、研究を進めて3年目となった。多少困難があったとしても、自ら考え、主体的に判断し、他者と協働して解決方法を模索していくことで、状況を切り拓いていくような子どもを育成することをねらいとした。

また、「自ら学びをつくる子ども」を育成するための基盤となるのは、多様性を認め合い、子ども一人ひとりの表現を受容し合う学級集団である。子どもたちが学習する意味や努力する価値を感じられるような集団づくりに取り組み、主体的な授業づくりとあたたかな学級づくりを両輪として、研究を進めてきた。

子どもは、学習課題が自分ごとになった時、解決に向けて主体的・意欲的に考えるようになる。その課題を友達と関わり合いながら解決することで、深い学びが実現される。こうして、子どもたちが主体的に学びに向かい、仲間との対話を重ねることができれば、子どもたちに進んで学ぶ態度が育ち、確かな学力がつくことになると考えた。

III 研究の実際

1 研究のねらい

「自ら学びをつくる子ども」とは、多様性を認め合い、自分ごととして課題に取り組み、仲間と対話を重ね協働的に学んでいく姿と言える。今年度は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の観点から授業改善を進める。それには、一人ひとりの考えを認め合うあたたかな学級が大前提であるので、特活を基盤として、学級がよりよい居場所となるように注力していく。

2 研究の視点

- 視点1 主体的な学びをつくる「単元計画の工夫」
- 視点2 対話が生まれるような「学び方の工夫」
- 視点3 子どもの学びを見取る「評価の工夫」

3 授業の実践

今年度は、1学期に全ての学級で授業研究会を行った。事後研では研究のねらいに迫るために話し合いを行ったり、指導主事から指導や助言をいただいたりしながら研究を進めてきた。それらを受けて、2学期に入ってから、定期的に部会研究会を設定し、授業づくりや指導案の検討を進めてきた。指導主事にも授業や子どもの様子を見ていただいたり、指導案作成に助言をいただいたりしながら、公開研究会への準備を進めてきた。

公開研究会では3つの学年の授業を公開した。多くの先生方に参観いただき、分科会では本校の研究に意見をいただいた。

(1) 校内授業研究会

学年	教科・単元 主な成果 (○) と課題 (▲)
一 年	<p>算数「のこりはいくつ ちがいはいくつ」</p> <p>○授業の中での学習規律、良好な友達関係の築き方など、子どもたちと確認しながら進めてきたことが、十分に見られた。</p> <p>○子ども同士の対話の中に、「どうしてそう思ったの?」「何本多い?」というような説明を求める交流が生まれていた</p> <p>▲「問題把握」「立式」「操作」「答え方」という点と点がつながっていないことから、混乱を招いてしまった場面があった。活動のつながりというところを意識していく。</p>
二 年	<p>国語「あったらいいな こんなもの」</p> <p>○教室内に、「なぜ～なのですか」といった質問・答え方の話型を提示したことにより、相手への質問をする際の手がかりとなっていた。</p> <p>○質問をし合ったり感想を伝え合ったりする本単元においては、繰り返し学習を重ねていくことで、安心して学習に取り組むことができるようになっていた。</p> <p>▲「引き出す」という言葉のイメージをうまく共有することができなかった。相手が考えていることをいかに引き出せるかが大切なのであり、考えていなかったことをひねり出すのではない。そのことについて時間をかけて丁寧に扱う必要があった。</p>
三 年	<p>社会「河北町のようす」</p> <p>○西里地区とともに、河北町全体を調べる活動を通して、山や川、田や果樹園の広がり、主要道路や工業団地などについて初めて認識することができた。</p> <p>○多くの資料や情報を前にしても、児童一人ひとりが何とか課題を解決しようと主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。</p> <p>▲どんな視点で児童に考えをもたせるか、理解を深める交流をどのような形でさせていくかを明確にしたい。児童同士の対話でつなぐ交流の場と時間を保障し、教師がどのように支援をしていくかを熟考していく必要があった。</p>
四 年	<p>算数「小数のしくみを調べよう」</p> <p>○前時までの学びの積み重ねがしっかりできていたことで、課題への取り組みがスムーズだった。</p> <p>○可能な限り子どもたちが中心となり課題の解決を図ったことによって、「わからない」と言っていた子どもたちも含め、みんなで考えようとする姿につながった。</p> <p>▲個人の考えをもつ時間が無かったため、考えがまとまりきらないまま、交流の場に流れてしまっていた。個人でじっくり考える時間を確保した後、交流することで小数のしくみを多面的・多角的に考えることができ、より深めることができた。</p>
五 年	<p>社会「米作りのさかんな地域」</p> <p>○米作りや田んぼは、日頃から身近な存在ではあるが、田植え体験学習後の本時の学習だったので、手植えの苦労や機械化の効率の良さを実感しながら考えることができた。</p> <p>○グラフの提示の仕方を工夫することで、2つのグラフの変化の関係に注目させ、「どうして?」「ふしぎじゃない?」と課題意識への働きかけをしながら、課題解決へ意欲を喚起することができた。</p> <p>▲資料を使って調べることは充実していたが、事実、知識を得るだけではなく、資料から何がわかるのか、資料と資料を結びつけるとどんなことが考えられるのかという、資料を読み取り考える力を高めていく必要がある。</p>

六 年	<p>算数「割合の表し方を調べよう」</p> <p>○単元を通して、「クレープパーティーをしよう!」というテーマを設定したことで、子どもたちも必要感をもって学習に取り組むことができた。また、1時間ごとに「今日は何の作り方だろう。」と意欲的に学習に向かうことができた。</p> <p>○自由交流の場面を多く取り入れたり、子どもたち自身が話し合いを進める活動を繰り返したりしたこと、難しい問題にも粘り強く、協力しながら学ぶ姿勢が育ってきている。</p> <p>▲子どもたち自身が主体となって考える場面と教師が出る場面とをしっかりと見極め、学習を進める必要がある。</p>
--------	---

(2) 公開研究発表会 11月8日(金)

1年 算数科「ひきざん」

視点1 主体的な学びをつくる「単元計画の工夫」

「ひきひき」「ひきたし」という子どもたちの中で共通理解されたネーミングで進むのは良かった。しかし、減々法の良さに気づくことができたのかは疑問が残るところだったので、両方の方法でブロックを動かすなどの活動を取り入れると良かった。

視点2 対話が生まれるような「学び方の工夫」

意欲的に学びに向かっており、「確かに」「いいです」など、友達の発言に対しての反応がよく見られた。机ではなくテーブルで座って話せる場の設定も、安心感があってとても良かった。解らないときは教師ではなく友達に聞くなど、仲間同士で解決しようとするなど、自立して学ぼうとする態度が見られた。

視点3 子どもの学びを見取る「評価の工夫」

子どものつぶやきを教師が拾いながら、全体の学びを深めていた。今後はふり返りの視点を焦点化していくとさらに深まるものになるのではないかな。



3年 社会科「はたらく人とわたしたちの暮らし(2) 店ではたらく人」

視点1 主体的な学びをつくる「単元計画の工夫」

学習計画表を掲示したことでめあてが明確になっており、子どもが今日は何について学習するのか課題を明確に捉えて取り組む姿が見られた。

視点2 対話が生まれるような「学び方の工夫」

交流の場面では、聞く、反応を返すなどのリアクションスキルの積み重ねが見られた。自分がタブレットで撮影してきた写真を直接見せ合うなど、自分ごととして自信を持って考えを伝えることができていた。反面、画面に書いてある文を読み上げるだけで終わってしまう子もいたので、さらに交流が深まる工夫が必要だった。



視点3 子どもの学びを見取る「評価の工夫」

ふり返りのカードは穴埋め式になっており、まとめやすく工夫されていた。記入の内容は子どもたちが自分の言葉で書くことができ、日々の積み重ねが見えた。時間の確保が課題となる。



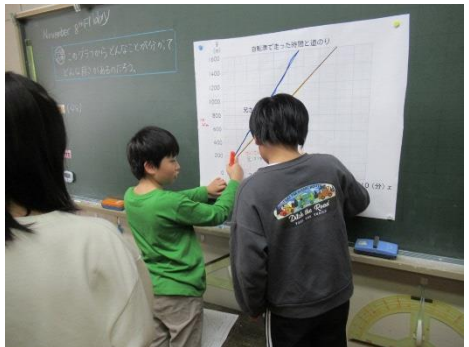
6年 算数科「比例と反比例」

視点1 主体的な学びをつくる「単元計画の工夫」

前時とのつながりを授業者も子どもたちも意識しており、前時と比較しながらグラフを意欲的に読み取ろうとしていた。課題を工夫して、子どもたちにグラフを読み取る必要感を持たせるとより深い読み取りにつながったのではないかな。

視点2 対話が生まれるような「学び方の工夫」

ホワイトボードと黒板を活用した3つの場作りにより、子どもたちが自然に話しやすい環境がつけられていた。交流やICT活用にも慣れている様子がよく見られた。より深い学び合いのためには、グラフのどこを見て何を比べるのか、焦点化する必要があった。



視点3 子どもの学びを見取る「評価の工夫」

個別に用意された学習シートにより、個の学びを見取ることができていた。交流のために提出したロイロノートでも子どもたちの学びの足跡を蓄積していくことにつながり、評価に活用できていた。



IV 成果と課題

- 全校挙げて学級経営を軸とした研修を重ねてきていることで、どの学級にも自分の意見を自由に言い合える雰囲気生まれている。不登校や、授業から外れ離席する児童もいない。
- 単元全体を意識した授業づくりができていることで、子どもたちが見通しを持って取り組むことができている。
- 教師にICTを積極的に活用しようという意識があることで、タブレットの使用機会も増え、どの学年でも子どもたちが操作に慣れている。
- ▲「交流」ができる素地はできたが、なかなか「対話」に深まりが生まれてこない。友好的な関係を大事にすることで、異なる意見を控えてしまうような姿も見受けられる。何について話すのか授業の中で焦点化したり、異なる意見から最適解を探っていく態度を育成したりすることが今後さらに求められる。どのように話を進めれば良いのかさらに経験を積ませたい。
- ▲ICTの活用が必要な場面とそうでない場面がある。限られた授業時間の中で、タブレットを使った方が効果的かどうかを見極めながら活用を進めていく。
- ▲子どもたちに任せる授業スタイルを進める上で、どうしても教師が話し過ぎる傾向が強い。教師の待ちと出のバランスを考えた授業づくりを進めていかなければならない。

(樋口 智一)

学校研究

I 研究主題

自ら学び続ける子どもの育成（５年次）

II 主題設定の理由

1 教育目標

ふるさとだいすき	・・・	ふるさとについて理解を深め 行動を起こす子ども
かしこく	・・・	主体的に楽しく学び よりよいものを創造する子ども
つよく	・・・	心身とも健康で 粘り強く取り組む子ども
やさしく	・・・	自他を大切にし 思いやりのある子ども
～ つながりの中で わたしたちが創る 楽しい学校 ～		

2 昨年度までの研究から

本校では、昨年度まで「自ら学び続ける子どもの育成」という研究主題のもと、育成を目指す資質・能力を「主体性」と「表現力」の二点にして、教育目標の具現化に向けて学校研究を進めてきた。昨年度の研究では、各担任が目指す子どもの姿を明らかにしながら児童の実態に応じた手立てを講じて授業改善を行った。その結果、「課題を自分事として捉えて学習に臨んでいた」「自分の言葉で自分の思いや考えを話すことができるようになってきた」など、一定の成果が見られた。その一方で、「学習者に『やらされている』という意識がある」「表現する際の相手意識や目的意識が弱い」という課題も残った。以上のことから、学校教育目標の具現化に向けた研究の方向性に間違いはないということ、児童の主体性を更に伸ばしていく必要があることが確認できた。

そこで、今年度も研究主題「自ら学び続ける子どもの育成」を継続するとともに、育成を目指す資質・能力を「主体性」の一点にし、各担任が学級の実態に合わせて個人研究テーマを設けて研究に臨むこととした。

III 研究の実際

1年 体育科 みんなが楽しい鬼遊び

研究テーマ 自分の思いを表現し、友達と関わりながら学習を楽しむことができる授業づくり

＜手立て①＞ 安心して自分の思いを表現するための工夫

◇「攻め方を選ぶ」、「友達のよい動きを伝える」、「振り返りの場面等で友達と伝え合う」時間を設定し、自分の考えや思いを伝えられるようにした。また、攻め方を簡単なキーワードにし、思いを表現しやすくした。その結果、児童がそのキーワードを用いて作戦を考えたり、他の児童のよい動きについて表現したりする姿が見られた。

＜手立て②＞ みんなが楽しい鬼遊びにするための規則の工夫

◇「何回もチャレンジできる」、「攻めと守りの人数の調整」などで簡単な規則にしたことで、全員ができる喜びを感じ、楽しむことができた。また、活動の振り返りを行い、全体で共有してみんなで規則を変えたり、攻め方を話し合ったりした。友達の良い動きから攻め方を考えたり、さらにみんなが楽しい鬼遊びになるようなルールを考えたりすることができた。チームや規則、攻め方が分かりやすくなるよう規則や攻め方の図を提示したり、ビブスを着用したりした。みんなが楽しくなるように自分たちで主体的に工夫しようとする姿が多く見られた。

3年 国語科 民話のおもしろさをみつけよう「三年とうげ」

研究テーマ 児童同士がつながり、学び合い教え合う授業づくり

〈手立て①〉 自分の思いを表現するための考えの可視化

◇自分の思いや考えの根拠となる叙述に線を引いたりノートに書いたりして、物語の楽しさやおもしろさを可視化していった。本時ではおもしろいと思った叙述1か所に線を引いたことで自分の考えを相手に伝えようとする姿が見られた。さらに自分が選んだ民話の本のおもしろさについて友達と話したり質問し合ったりしたことを付箋に貼ったことでおもしろさを伝える手がかりとなり、交流する様子が見られた。

〈手立て②〉 互いの話を聴き、考えを広げるための話し合い

◇単元の中でおもしろさを感じる場面やその理由を伝え合うために話し合いの場を設けた。共感的に聞いたり、相違点に気づいたりする児童が多く見られた。ねらいをもった伝え合いを続けていくことで、比べて聞いたり、自分の考えを広げたりできるようになってきた。しかし、児童の伝え合いのスキルについては、教師から提示したりモデルを示したりしていく必要があった。



6年 社会科 縄文のむらから古墳のくにへ

研究テーマ 児童と共に課題を設定し、課題解決に向けて児童同士のつながりを大切にしたい授業づくり

〈手立て①〉 問いをもちながら学び進めるための課題づくりとテーマの自己決定

◇単元の導入で、縄文時代から古墳時代へと変化した様子を想像図で読み取り、児童の気づきや疑問から単元を貫いた課題を設定した。児童の発言からその時代の衣食住の様子などテーマになりそうな項目を抽出し、テーマを自己決定した。そして、ロイロノートに写真や図を使って表現した。テーマを自己決定したことで、児童は主体的に学習に臨んでいたものの、本時の課題が複雑で児童のものになり切っていなかったため、ねらいを明確にして児童と共に課題を設定することが必要であった。

〈手立て②〉 根拠を基にして伝え合うための交流の場の設定

◇自分で決めたテーマで調べ学習を行った後、交流を通して知識を広げたり深めたりできるようにするため、グループで根拠を基に説明した。交流を経てさらに調べたいことを明確にし、全体で交流できるように学習を進めた。インターネットを活用したが、資料の信ぴょう性に欠けるものがあり、資料の吟味などの手立てが必要だった。自分の発表とのつながりを意識し発表を聞くよう促したが、気づいていない児童もいたため、関連性に気づけるよう教師の見取りと支援が必要だった。

IV 成果と課題

- 各担任がその学年や児童に合った研究テーマを設定したことで、実態に合った単元構成や課題設定をすることができた。さらに、単元構成や課題設定を児童と共に行うことで、課題を自分事として捉え主体的に学習に臨む児童が増えてきている。
- ペアやグループ、全体で自分の考えを表現する活動を学年に合わせて繰り返し行ったことで、友達の考えを受け、主体的に自分の言葉で思いや考えを表現している児童が増えてきている。さらに力を伸ばせるよう、指導者側が適切な「出と待ち」を意識し、交流のねらいを明確にしながら児童が生き生きと学び続ける場の設定を心がけていく。
- ▲児童と共に課題設定や単元構成を考えて自ら学びを創ってきたが、児童になかなか必要感が生まれない。教師側が意図やねらいをもち、学びや交流を仕組んでいけば児童の主体性をより高めることができる。教師は児童に任せる場面を意識しつつ、児童に話し合いのスキルを指導しながら授業づくりを行う必要がある。

(阿部 まな美)

I 研究主題

仲間と関わりながら、学び方を身に付ける子どもを育てる
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～

II 主題設定の理由

本校は「Challenge & Thinking ～前に踏み出し チーム力を高め 考え抜く中部の子」という学校教育目標を掲げている。その目標を具現化するために、二つの視点を意識して研究を進める。「仲間と関わりながら」では、自分で考えたことを意見交換したり、議論したりする場を流動的に設け、新たな考え方に気づき、自己の変容の自覚へとつなげる。小学校という小さなコミュニティの中でも、子どもたちは対話力を継続的に身に付ける必要があると考える。「学び方を身に付ける」においては、学び方のサイクルである《課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現》を生活の中の様々な場面で意識させていく。このサイクルが日常化し身近なものになり、実生活での課題解決や危機管理にも役立ち、自らの楽しみや幸せを生み出すサイクルにも有用ではないかと考え、授業・教材研究に取り組んでいく。

＜授業改善の主な視点＞

- 課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫
- 課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫
- 自分や友達の良さや成長を実感できるための工夫

III 研究の実際

第4学年の実践 総合的な学習の時間「個人推し活」

＜課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫＞

- ・自分が選んだ課題という強み
 - 学習意欲が高い。没頭して取り組む児童が多く見られた。
 - ▲自分のめあてやゴールの姿が明確ではない児童がいた。

＜課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫＞

- ・プロフェッショナルとの交流の機会
 - 地域ボランティアとして子どもたちの活動を支えていただくことで、活動の幅が広がり、深めたいと思う意識も高まった。
 - ☆本校で個人総合を継続していく上で、前年度のデータ（課題の持たせ方に係る資料や子どもたちの振り返りのデータ）などを残しておくことが必要である。

＜自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫＞

- ・振り返りの意味・振り返ることの価値を子どもたちがしっかり捉えているか
 - 自分の活動を素直に振り返ることができた。
 - ▲次時のめあてにつながる振り返りを書く上で、教科横断を意識して言葉を選んで書ける児

童が少ない。(cf;算数的用語を積極的に用いて、文章化する等)

＜今後生かしていきたいこと＞

☆次時につながる視点で振り返りを書かせることで、児童の活動につながりが見られ、教師からの意図をもった声掛けがしやすくなる。

☆場の設定や道具の扱いに課題があるため、見守る人数を増やしたり、異学年同時に実施したりするなど学校として体制を整えていく必要がある。

第5学年の実践 国語「みんなが使いやすいデザイン」

＜課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方をさがすための工夫＞

- ・情報源の準備や活動の流れの共有

○学校司書の協力をいただき、たくさんの本から世の中に当たり前のように存在するUDに触れることができ、自分が伝えたいものを選択する必要性や楽しさがあつた。

▲インターネットから情報を得ることの難しさがあつた。

→自分の伝えたいことと検索ワードをリンクさせていくことで、自分が欲しい情報を最短距離で得るという社会で使える力にもつながっていく。

＜課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫＞

- ・対話の在り方

▲友達と一緒にの空間で学習する意味をもたせたらよかったのではないかな

→本時で狙うところが、個の学習・自分の課題との対話という形をイメージしていたため、協働的な関わりを促すことができなかった。必要な場面で、自ら交流できる子どもたちになりつつあるので、有益な交流になるような場面を教師側がしっかりデザインしていく必要がある。

＜自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫＞

- ・自己の変容を振り返る

○本時のめあてに立ち返って、自分がその時間にがんばったことを価値づけたり、次時への思いを高めたりすることができた。

▲ロイロノートを活用している点からも、振り返りをロイロノート上に残していくという活動にしてもよかった。

＜今後生かしていきたいこと＞

☆学習ツールの選択の幅をもつこと→児童自身が学習ツールを選び、探究していくという高学年ならではの姿を追っていく。

☆内なる思いの言語化→自らが語りたくなる課題を設定したり、図や絵、写真を用いて言語化することを日常化したりすることに加え、自分の思いを安心して表すことのできる環境づくりを意識して行っていく。

IV 成果と課題

今年度は、早稲田大学小林宏己名誉教授からご指導いただきました。
次年度の学校研究につなげていきたいと思います。

○学年総合や個人総合の学習を通して探究プロセスを身に付けている。その良さや価値を自覚できる手立てをもつことで、自己調整できる子どもたちへの成長を促すことができる。

▲「見取る」ことで必要な教師の出が実感できる。系統を立てて重層的に見取ることが必要である。

▲個に還る学びが保障されるために、対話的な学びの捉え方を共有し、必要感のある交流の場・安心して課題に没頭できる環境・内在化する思いを言語化する時間をコーディネートしていく教師としての技量をチーム学校で向上させていく。
(軽部 亜希子)

I 研究主題

深い学びの実現を目指して ～単元デザインを核とした授業づくり～

II 主題設定の理由

本校は、「未来をひらき、しなやかに生きる力を育む教育」を学校教育目標に掲げ、「一歩踏み出す力」「チーム力」「あきらめず考え抜く力」の3つの資質・能力（社会人基礎力）を育むよう教育活動を推進している。

学校教育目標と本校の児童の実態を受け、研究テーマを「深い学びの実現を目指して～単元デザインを核とした授業づくり～」と設定した。昨年度までは「主体的な学びをつくるための工夫」「対話的な学びをつくるための工夫」の2つを授業改善の視点として研究に取り組み、単元構成の工夫や目的に応じた交流の場の設定など一定の成果を上げることができた。しかし、一方で、目に見える学力向上のほか学ぶ意欲や粘り強さ等の個人差拡大、基礎基本の未定着など複数の課題が明らかとなった。

そこで、「個別最適な単元デザイン」「教科の見方・考え方を働かせた深い学び」「家庭学習との効果的な接続」の3つの研究視点を重視しながら授業改善を継続することで、誰一人取り残さず、学力の向上を目指すことを目標とした。

III 研究の実際

第2学年 国語科「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

☆学校研究とかかわらせて（教師の手立て）

- ①作り方を説明する上で大事な言葉がないとどうなるのかモデルを示したり、その言葉がないと困る理由などを問い返したりすることで、言葉に注目して読む姿勢を育てる。
- ②文章を読みながらおもちゃを作る活動や、自分の選んだおもちゃを作りながら書くために必要な情報を整理する活動を通して、体験から「読みたい」「書きたい」という思いを引き出していく。
- ③大事な言葉を選び出す学習や写真と文をつなげて読む学習、写真を工夫して取り合う学習などはグループをつくり、友達との関わりの中で互いの学びが深まるようにする。



(実践の考察)

- 書くことが苦手な児童にとって、書きたいことを友達に話す活動を通して、書く内容を整理することができ、書くためのモチベーションを高めることができた。
- ロイロノートを活用し、写真を使って話す順番を考えたり、必要な情報を選んだりする力を育てることができた。
- ▲学習活動が複雑になり、教師が児童の学びを見取るのが難しかった。
- ▲写真を選ぶ→児童にとっては全部が大事な写真(資料)なので、説明にあたって選択するという活動は難易度が高かった。

第6学年 算数科「円の面積の求め方を考えよう」

☆学校研究とかかわらせて(教師の手立て)

- ①自由な学習形態を認め、自分の学び方に合った形態を選択させることで、自分の学びを自分で深めていけるようにする。
- ②図形の捉えが苦手な児童が、「何を考えればよいのか」「どのように考えていけばよいのか」の見通しをもつことができるように、適宜コーディネートし学びが持続するようにする。
- ③学んだことや考えたことがより深まるように、考えを紹介し合って交流できる時間を毎時間取り、自信をもてるようにする。

(実践の考察)

- 児童自身が必要感をもって友達との交流を図ることで、自分が課題を解決するため主体的に学ぶ姿勢を育てることができた。
- ICTを活用し、友達の考えと自分の考え方を比較して捉える児童の姿が見られた。
- ▲補助的なツールは日頃から使い慣らしておくことが必要であり、目に見える・すぐに手に取れるような整備が大切である。



IV 成果と課題

- 特別支援教育の視点を意識し、児童の実態(つまずき・必要な支援など)に合わせた単元・授業づくりを行うことができた。
- 自分の考えや思いを他者と伝え合う活動を多く設定し、学習の理解を深めるだけでなく、みんなで課題を解決しようとする粘り強さも育てることができた。
- ▲今年度の研究視点の一つである「家庭学習との効果的な接続」の成果が見えづらかった。来年度は各学年の家庭学習の具体的な取り組み例を学校全体で共有し、家庭にも周知するようにする。

(田口 新)

I 研究主題

誰一人取り残さない 子供が育つ授業づくり

II 主題設定の理由

本校は、「誰一人取り残さない 子供が育つ学校づくり」を学校教育目標に掲げている。全ての子どもの学びを保障し、「自分で考え、決定して行動できる」ことをねらいとしている。

昨年度の授業研究会では、育てたい資質・能力をもとに、子どもの実態に合わせた授業をつくったり、子どもの変容を見取ったりしたことで児童理解が深まったという成果が得られた。しかし、育てたい資質・能力が身に付くためには、資質・能力系統表を子どもたちと共有しながら授業づくりをすることや子ども同士の関係性を育むことの大切さが挙げられた。さらに、「学び方を振り返るための手立て（自己調整力の育成）」、「見取りを生かした授業づくり」などが課題として出された。また、資質・能力の育成と同時に、「教科としての見方・考え方を働かせたか」という視点を持った授業づくりをどのように進めていくかについても考えていく必要があるとのご指導をいただいた。

以上の理由から、今年度も、研究主題を、「誰一人取り残さない子供が育つ授業」と設定した。複式の授業の強みやカリキュラム・マネジメントの視点を大切にして「探究型学習」に向けて授業改善を進めていく。

III 研究の実際

1 研究の視点(学校全体で育成を目指す資質・能力とのかかわり)

(1) 自ら行動する力【自律と主体性】

- ・自ら学ぶ力の育成（子どもが学習の見通しを持ち、自分たちの学びを作るために、学び方の支援、問いかけや「単元づくり」「授業づくり」を子どもの実態や教材の特性に合わせて計画する。）
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図っていく。（目標達成までの道筋や追求課題の相違を捉えた授業展開、教材研究やカリキュラム・マネジメントの充実）
- ・ICT機器の日常的活用をする。（学びの個人差や、考えの共有への対応）

(2) 人を大切にする力【尊重と対話】

- ・違いを優劣なく認め、互いを尊重し合う学習を仕組む。（考えの広がりや深まりのある主体的な話し合いを通して、みんなで学ぶことのよさが実感できるようにする。）
- ・対話を通した、合意形成の積み重ね（当事者意識を持たせることを大事にし、子ども同士を言葉でつなぐ。）

(3) 考え抜く力【挑戦と創造】

- ・自己決定する場の積み重ねのある学習を展開する。（子どもの学習の振り返りを次時につなげるとともに、「個に返す」指導と評価の一体化を行う。）
- ・学習で知識同士をつなげて活用する。（他教科で得た知識を、教科横断的な学びの中で結び付けていく。）
- ・課題に対して粘り強く解決し、挑戦する意欲を持たせる。（課題解決の手段や、伝え方は子どもが自分で決定していけるように支援する。）

2 授業の実践（学年・教科・単元 子どもの姿の変容と教師の見取り・支援）

（1）1年 国語科「どんなおはなしができるかな」 2年国語科「そうだんにのってください」

学習のめあてや流れ、学習の足跡の掲示等の学習環境が整えられていて、子どもたちは本時の見通しをもって学習することができた。1年生は、ペープサートを使って動物になり切って話すことができていた。話題からそれる場面もあったが、場面の絵からいろいろな発想を引き出すことができた。それらが、文章作りへの土台となった。2年生は、どんな相談をするのか、話題を決めるのは難しいと思ったが、子どもたち自身が選択したことで、自分事として話合いをすることができた。お互いに相手の立場になって質問したり呼びかけたりする場面が見られた。

（2）3年 国語科「ちいちゃんのかげおくり」4年 国語科「ごんぎつね」

物語教材に興味をもっている子どもたちだったが、これまでの場面ごとを読み取る方法では子どもたちに合った学習にならないことがわかった。3年生では、各自が読み取ったことや疑問点を話すことはできていた。しかし、そこからみんなで考えるためには、子どもたちが納得した計画や明確なゴールの姿が必要だった。4年生は、間接指導の時に、自分たちで学びをつくろうとする姿が見られた。しかし、各自がプリントを持っていたために、書くことだけに集中し、相談したり書いたことを出し合ったりすることができなかった。4人で話し合うための必然性を持たせることが大切だと感じた。

（3）5年 国語科「みんなが使いやすいデザイン」6年 算数科「分数でわる計算を考えよう」

友達に聞きに行ったり教えたりすることが自然にでき、45分間、みんなで学習しようとする意欲が感じられた。5年生は、本時の大事なことを理解して学習に向かうことができていた。見やすいメモの仕方や整理の仕方を、タブレットやワークシートなど、各自が選んで取り組んでいた。6年生は、課題意識をもってスタートしていたので、自然に質問できる関係性が築かれていた。ただ話し合うだけでなく、2人で教科書を調べて解決しようとする姿も見られた。一人ひとりが課題に向かっていると同時に、必要に応じ協力して学習に取り組もうとする姿が見られた。

（4）1年学習室 自立活動「店員さんになろう」

お店屋さんの準備をしていく中で、子ども自身で決める場面がたくさん設定されていた。めあてに向かって活動することができるように、めあてを書いたり読んだり、繰り返し確認し学習が進められた。前時までの活動を写真で振り返ったり、言葉を書き出して見せたり、視覚的なものが学習の支えとなっていた。繰り返し練習して身に付くこともあるが、今までとは違った場面に対応する活動も取り入れたことで、自ら考えて行動することができた。



IV 成果と課題

○育てたい資質・能力をもとに、子どもの実態に合わせた授業づくりを考え、授業での子どもの姿を見取ることで、児童理解が深まったり、支援の仕方を考えたりすることができた。

▲子どもの実態や教科の特性に合わせて、単元づくりや授業づくりに取り組んできたが、まだ十分に支援ができているとは言えない。今後さらに、子どもたちの主体的な学習を促す単元づくりや、その子どもに合った支援の在り方を考えていく必要がある。

（ 原田 幸江 ）

I 研究主題

「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成

～ 一人一人が考え、みんなで深める ～

II 主題設定の理由

本校は、研究テーマを「生き生きと学び続ける北谷地っ子」と設定した。「生き生きと学び続ける」とは、子どもたち一人ひとりが学習のめあてや課題をもち、その追究の仕方がわかり、自分の考えや思いを積極的に表現し、互いのよさを認め合いながら高まっていく姿と捉えた。

今年度も研究主題を『「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成』とし、児童一人ひとりが考えをもち、児童同士で学びを深めていくことを目指して、「一人ひとりが考え、みんなで深める」というサブテーマを設定し、テーマに迫っていくこととした。

III 研究の実際

1 研究の方法

- ・次の2つの視点を設け、研究・実践を推し進めた。

視点1 一人一人が考えていたか

視点2 みんなで深めていたか

- ・各自が選んだ重点研究教科の授業を公開した。
- ・事後研究会では、2つの視点について児童の姿をもとに話し合いを進めた。
- ・学期末に「授業チェックシート」を活用し、指導者が自己の授業を振り返り、成果と課題を見つけ、授業改善に生かした。



2 授業の実際

学年	教科と単元	主な成果（○）と課題（▲）
一 年	算数科 「たしざん」	<p>○ペアで自分の考えを出し合う中で、積極的に授業に臨んだり発表したりなど意欲的に取り組むことができた。</p> <p>○学習シートや図、おはじきや黒板を開放したことで、のびのびと自分の考えを表したり、友達の考えと比べることで多様な考え方があることに気づいたりできた。</p> <p>▲子どもが主体的に授業に臨めるように、発問を子ども同士の思考をつなぐ授業の構成を考えていきたい。</p>

二・三年 複式	<p>2年生：算数科 かけ算（2）「九九をつくろう」 ○前時までの学習内容を掲示したり、単元を通して同じ学習の流れで進めたりしたことで、安心して学習活動に取り組むことができた。 ○学習リーダーが中心となり自分たちで話し合いを進めていくことで、自分たちで考えを出し合い解決しようとする姿が多く見られた。 ▲学んだことをどう自覚させるか、評価問題の内容を考えていく。</p>
	<p>3年生：算数科 分数「分数を使った大きさの表し方を調べよう」 ○学習リーダーが中心となり自分たちで話し合いを進めていくことで、めあてや学習活動が自分事となって最後まで取り組むことができた。 ○自分の考えをホワイトボードに書き表すことで、友達の考えとの相違点が分かりやすく、全体での話し合いでも活用することができた。 ▲学んだことをどう自覚させるか、評価問題の内容を考えていく。</p>
四年	<p>総合的な学習の時間 「もっと知りたい河北町 ～紅花について調べよう～」 ○体験が実感のこもった気づき、問い、好奇心へとつながり、関心が長続きし自ら学びを深めていくことができた。 ○西部小の3・4年生に発表するという相手意識を持つことで、詳しく分かりやすくまとめる意欲へつながった。 ▲自分の思いを言葉で話す時間を取り、自分たちでまとめていく活動を多くしていく。</p>
五年	<p>算数科 合同な図形「形も大きさも同じ図形を調べよう」 ○課題を解決するための方法や調べ方などを自分で選択することで、一人ひとりが見通しを持って意欲的に取り組む姿が見られた。 ○一人ひとりの考えをグループ交流で出し合うことで、一人では気づかなかった考えに気づいたり、「なんで？」と気軽に友達に聞いたりして学びを深めることができた。 ▲全体での交流の場でも、友達の考えと比較しながら聞けるようにしたい。</p>
六年	<p>算数科 比例と反比例「比例の性質を活用しよう」 ○数値を、「家から学校までの距離」など身近な数値で考えることで、比例の性質を使った問題解決の方法を日常生活に活かすよさを感じることができた。 ○実物を操作しながら、班で試行錯誤して問題を解決することができた。 ▲問題解決に活かすために、授業の初めに復習や振り返り問題を解き、さらに基礎的知識の定着を図っていききたい。</p>
きょうりゅう (四年)	<p>算数科 小数のしくみを調べよう ○児童が関心を持っている乗り物の問題を取り上げたことで学習意欲が高まり、主体的に学習し進んで解決しようとしていた。 ○筆算の仕方で、教師から提示された筆算の書き方が違う理由をこれまでの学習経験をもとにしながら発言していた。 ▲考えを深めるためにも教師相手にアウトプットしていく活動を入れていきたい。</p>

IV 成果と課題

○本時の流れやゴールを明確にした授業づくりをしたり、ICT 機器を積極的に活用したりしたことで、見通しを持って課題に取り組むことができた。また、友達と交流する場を設定したことで、自信をもって自分の考えを表現することができた。

▲「教師の出」の場面を考えながら子どもの思考の時間を確保し、一人ひとりが自分の考えをしっかりと持てるようにしていきたい。

▲みんなで考えを深めるために、自分の思いや考えを友達に伝える場を積極的に設定していきたい。

(布川 美智子)

I 研究主題

生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成(3年次)

II 主題設定の理由

本校の学校教育目標である「つながりの中で自立する生徒の育成」を踏まえ、一昨年度より上記の研究主題を設定し、研鑽に励んできた。

本校の生徒は、素直さと真面目さを生かして、さまざまな活動に意欲的に取り組むことができる反面、失敗を恐れて指示待ちになったり、積極性に欠けたりする一面も見られる。そういった生徒の実態を踏まえ、学校全体として育みたい具体的な「自立に向かう生徒の姿」を、

(1) 課題意識を持ち、周囲とのつながりから学び、自己表現する生徒

(2) 目標に向かって、自らの学びを振り返り、工夫・改善する生徒

とし、アクションプランを活用しながら、「自己調整力・レジリエンス」「思考力・判断力・表現力」「自己肯定感・他者理解」「コミュニケーション力」を複雑に関連付け、その具現化を目指すものである。

III 研究の実際

1 研究の視点

研究主題に迫るために、以下の【視点】を重視して研究にあたる。

【視点】表現力を高める教材の活用の工夫

これまでの研究の成果を生かしながら、今年度は「表現力」に焦点を当て、研究を推進する。「表現力」の醸成には、主体性はもちろん、他者とのつながりや対話、振り返りによる自己調整力も重要な要素になると考える。また、それらを通して仲間との結びつきを強くし、自己肯定感の高まりも期待できると考える。教材をさまざまな視点で見つめ直し、生徒の表現力を高める活用を目指したい。

これまでも大切にしてきた「基礎基本の定着」を根底に置きながら、以上の【視点】を持って研究を進め、研究主題である「生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成」に迫っていく。

2 授業参観の視点

授業を参観する際のポイントを「生徒の様子」に置き、表情や仕草、反応や発言から、考えの変容や深まり、成果や課題を見出していくことで、より「生徒」の目線に立った授業づくりを目指す。

3 授業の実際

(1) 3年生 数学科 単元名「関数 $y=ax^2$ 」

数学科では自立に向かう生徒の姿を「自分の考えを式や文章で表すことができる生徒」「式から考えを読み取ることができる生徒」と捉える。公開した単元における、研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点】表現力を高める教材の活用の工夫

- ・ICTを活用することで、グラフの概形を視覚的にとらえ、グラフの特徴を自分の言葉で表現させる。

グループ協議でのご意見

○これまでのグラフの特徴や、表現するために必要な数学的な用語が生徒から多く出た。

既習事項の確認が本時の授業にうまくつながっていた。

▲今回は、グラフの概形をつかむことが目的のため、ICTを活用し点を自動的に打ったが、ICTは使用せずに点を打ち、どのような形ができるのか考えることも面白いのではないか。

(2) 1年生 国語科 単元名「『星の花が降るころに』～作品のよさ（魅力）を説明しよう～」

国語科では自立に向かう生徒の姿を「言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現することができる生徒」と捉える。公開した単元における、研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点】表現力を高める教材の活用の工夫

- ・作品のよさを表現するために同じ観点を選んだ生徒同士のグループで、多様な考えや共感、新たな気づきをねらって対話をさせる。

グループ協議でのご意見

○板書が工夫されていたため、読み取る時の観点の比較が容易にできるよう工夫されていた。

▲一人で考えさせてみんなと話し合いをするためには、発達段階を考えるとどこまで話し合いをするのか明確にする必要があったのではないか。



(3) 2年生 技術科 単元名「材料と加工に関する技術 ～完成した製作品を評価しよう～」

技術科では、自立に向かう生徒の姿を「技術の見方・考え方を働かせ、モノづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を通して、技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築するために、適切かつ誠実に技術を工夫し、創造しようとする生徒」と捉える。公開した単元における、今年度の研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点】表現力を高める教材の活用の工夫

- ・学んできた工具の使い方などを技術的な専門用語を用いてグループの中でアドバイスができる。

グループ協議でのご意見

○友達へアドバイスをすることで、自分で作品の振り返りを行ったときに気づかなかった視点にも気づくことができていた。

▲内容が画一的だったため、技術の見方・考え方（機能性、耐久性、生産効率など）を視点にプラスしていると専門用語も出やすかったのではないかな。

(4) 1年生 学活 議題「約束を見直し、信頼できる集団をつくろう！」

学活では、自立に向かう生徒の姿を「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見出し、解決するために話し合い、合意形成をし、役割分担して協働的に実践しようとする生徒」と捉える。公開した主題における、今年度の研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点】表現力を高める教材の活用の工夫

- ・合意形成を通して、自分と他者の意見に折り合いをつけたり、新しい考えを見出したりすることで、表現力を高める。

グループ協議でのご意見

○話し合いがスムーズに進むような工夫がたくさん見られた。（電子黒板の活用や、マグネットの使用など）

▲ただ約束を短くするのではなく、振り返りしやすい目標はどういうものかを生徒に考えさせる（数値を入れる、覚えやすいものなど）と良いのではないかな。



Ⅳ 成果と課題

○第1回の授業研究会をOJT形式の研修会にしたことで、さまざまな観点から今年度の【視点】に迫り、幅広い視野を持って研究に取り組むことができた。

○公開する授業を精選したことにより、1つの授業に対してより多くの職員が関わり、授業づくりを進めることができた。

○町内の小学校や谷地高等学校の先生方にも授業の様子をご覧いただき、小中・中高の連携にもつなげることができた。

○今年度も山形大学学術研究院教授の三浦登志一先生、河北町教育委員会教育主幹兼指導主事の吉田仁志先生から指導・助言をいただき、全職員で研鑽に励むことができた。

▲日頃からお互いに授業を見合う環境が構築されれば、さらなる授業力の向上につながると感じた。さまざまな方法を模索していきたい。



(高橋 拓也)

あ と が き

11月8日、西里小学校で小中実践交流の公開授業研究会が行われました。それまでに何度も村山教育事務所や町教育委員会の指導主事の先生方よりご指導をいただきました。その中で印象的だったのが、『『探究的な学び』はもはや当たり前のことです。』という言葉でした。果たして日々の授業がそうになっているのかという反省からのスタートでした。

改めてことばの共通理解を図るところから始めました。「主体的で深い学び」というけれど、「主体的と自主的の違い」はどうなのか。「深い」とはどこまでを目指すのか。「対話的な」というけれど、「対話と会話と話し合いとどう違うのか」という吟味をしました。この共通理解を図る過程は、学校研究においてかなり大事なプロセスです。一度ならず、授業研究の途中で何度も「対話ってどういうことだったか。」「この子どもの姿は主体的と言えるのか。」「深い学びとは言えないだろう。」と確認が入りました。

今年度、西里小学校で授業改善を考えたときに、大きく納得したことが2つあります

1つ目は「学級経営」です。「対話的な学び合い」は、心が解放され、多様な考えを認め合うことができる学級でなければ成立はしません。学級経営は授業の土台です。そこで、特別活動に力をおいて学級経営を大事にしました。友達と共に学ぶ楽しさの体験が重要です。

2つ目は「教科の本質的な楽しさ」です。国語のことばの学びの楽しさ、算数の数学的なおもしろさ、理科の科学的な見方・考え方の広がりなど、教科の本質的な学びの楽しさを、もっともっと指導者自身が感じて授業に反映させなければならないのではないかと考えさせられました。

今後、河北町の小学校は、谷地中部小と谷地南部小を除いた全部の小学校で複式学級を抱えるようになります。西村山全体、山形県全体が児童数の減少により、学校統合の流れになっています。その統合までの間に、小規模校における複式授業の授業づくりが課題になることは間違いありません。そんな中、複式授業の経験をもった先生方も少なくなっています。しかし、過度に不安を感じることはないと思っています。複式授業は「主体的に学ぶ子ども」を育てれば大丈夫です。教師主導の受動的な授業を、子ども自身が学びを進める授業に改善していくことで、複式授業を展開できるようになります。現在、私たちが目指している授業改善の方向性は間違っていないと思います。しかしながら、もう時はすぐそこに迫っています。教師主導の授業の改善に、本腰を入れて進めなくてはなりません。

この紀要には、河北町に勤務なされた小学校、中学校の先生方の1年の取り組みが記されています。更なる小中連携の視点から熟読いただき、明日からの授業改善に生かしていただければ幸いです。

結びになりますが、本研究所のためにご支援・ご指導を賜りました河北町、河北町教育委員会をはじめ、本研究所の事業の準備・運営にあたってくださいました全ての職員の皆様に感謝申し上げます。

(副所長 須藤 里佳)